人智学的観相学

ノルベルト・グラス

Norbert Glas

『手は人間を明らかにする』

Die Hände offenbaren den Menschen

〔目次〕

まえがき
手相・手型の全体像（一般観相学）
手と指の個別観察（特殊観相学）
I. 親指
II. 人差し指
III. 中指
IV. 薬指
V. 小指
VI. 手
手と気質
左手と右手の連動（協調作用）
あとがき



神秘学遊戯団

■人智学的観相学
ノルベルト・グラス
Norbert Glas
『手は人間を明らかにする』
(Die Hände offenbaren den Menschen)

〔ノルベルト・グラスについて〕
〔まえがき〕

mediopos4512（2026.9.1）で
シュタイナーの「観相学」についてとりあげたが、
その視点を展開させたノルベルト・グラスの著作から
『手は人間を明らかにする』を紹介する。

『手は･･･』は、ノルベルト・グラスの代表的諸作である
以下の観相学シリーズ全8巻の第3巻目。

1）『Der Antlitz offenbart den Menschen. Eine geistgemäße Physiognomik』
(顔は人間を明らかにする／精神科学的観相学、1961)
2）『Die Temperamente』（気質、1963）
3）『Die Hände offenbaren den Menschen』（手は人間を明らかにする、1966）
4）『Die Füße offenbaren menschlichen Willen』
(足は人間の意志を明らかにする、1972)
5）『Die Haare des Menschen』（人間の髪、1979）
6）『Zur Physiognomik von Gang und Haltung des Menschen』
(歩き方と姿勢の人相学、1981)
7）『Mimik. Das bewegte Antlitz』（表情／動く顔、1985）
8）『Menschenfeindliche Kräfte im Antlitz』
(顔に現れる敵対的な力、1987。死後刊、死の前日に完成したとされる)

〔ノルベルト・グラスについて〕

ノルベルト・グラス（Norbert Glas、1897年1月28日 – 1986年3月30日）は、
ウィーンのユダヤ系家庭に育ち、ウィーン大学で医学を学んだ際、
オイゲン・コリスコと出会い、人智学に触れる。
1920年にはゲーテアヌム開所式において
ルドルフ・シュタイナーとイタ・ヴェークマンに会い、
1921年にはドルナハの医師向け講座にも参加し、
1923年にはオーストリア人智学協会の理事会に選ばれている。

1928年から1938年まで、
インスブルック近郊グナーデンヴァルトの治療施設を率い、
ヴェークマンの臨床治療研究所と連携していた。
1938年のオーストリア併合後に家族とともにイギリスへ移住し、
1940年以降はストラウド近郊に住む。

現地ではヴァルドルフ学校の校医を務め、診療所を開業。
小さな私立クリニックや老人ホームも運営し、
生涯現役の医師として活動した。
ホメオパシー協会のアソシエイトでもあった。

人智学の実践者として、
観相学（physiognomy）や人生の段階、
がん治療などに関する著作で知られている。

●『手は人間を明らかにする』目次

まえがき
手相・手型の全体像（一般観相学）
手と指の個別観察（特殊観相学）
I.　親指
II. 人差し指
III. 中指
IV. 薬指
V.　小指
VI. 手
手と気質
左手と右手の連動（協調作用）
あとがき

〔まえがき〕

観相学の第1巻『顔は人間を表す（Das Antlitz offenbart den Menschen）』、そして第2巻『気質（Die Temperamente）』に続き、この第3巻では、手の形から人間の姿に隠された秘密を解き明かす試みがなされます。前に挙げた2つの著作と同様に、本書においても、ルドルフ・シュタイナーが生涯の仕事として現代に伝えた人間観に全面的に依拠しています。

本研究は、長年にわたる医師としての経験の成果です。特別な専門知識を伝えるのではなく、誰もが人間という存在の謎を理解できるようになることを目指しています。教育者や教師、心理学者、そして医師の方々は、本書の解説や図版の中に、日々の専門業務に役立つヒントを見出すことができるでしょう。私たちは、読者の皆さまが実際の観察へと向かうための刺激を提供したいと願っています。愛を持って人間を観察する人は、その手の中に、ある意味で魂の謎を解き明かしてくれるような、数多くの神秘を発見することでしょう。

最後に、自分自身の弱点に気づくことは、自己認識への重要な第一歩になり得るということも付け加えておきます。なぜなら、弱点はただ意識にのぼらせるだけで、克服していくことができるからです。私たちは自分の限界を嘆くべきではありません。たとえ不快な側面がすでに身体の表面（見た目）に刻み込まれていたとしても、自らの意志によって、自分の中の多くのことを変え、向上させられることに満足すべきだからです。

したがって、本書が単に「教育学」に向けた出版物としてだけでなく、「自己教育」のための書としても受け入れられることを願っています。

〔手相・手型の全体像（一般観相学）〕
〔I〕～〔IX〕

●基本的な視点

ルドルフ・シュタイナーの
有機体三分節化（神経・感覚／リズム／代謝・運動）の視点に基づき、
手を「リズム人間（心臓・肺）」の延長として捉え、
二分（呼吸と循環）と三分（思考・感情・意志）が
手と指に映し出されている、という観相学。

手は頭部のように上向きでも足のように接地でもなく、
中央・水平の領域で活動し、
皮膚・爪・形・身ぶりを通じて内面と身体プロセスを明らかにし、
さらに高い視点では、手のひら中心が自我（エゴ）の統一点として現れる。

医学的観察、芸術作品、日常身ぶり、教育・治療への応用が
具体例として挙げられ、
手全体を人間の全体像の縮図として読む枠組みを示す。

●要点

・手の位置づけ：

手は腕の末端であり、リズム器官（心臓・肺）から外側へ広がる。
呼吸と循環の二分が、
4本の指側（「指の手」＝呼吸・神経・意識）と
親指側（「親指の手」＝循環・代謝・意志）に対応する。
皮膚の色、爪の青白さ、バチ状指などは胸腔内のリズム障害を直接示す。

・二分と身ぶり：

拳を握る（親指が4本の指を抑え込む）は怒り・過剰な意志。
親指を他の指で包むのは内省・執着・意志の未発動。
呼吸の呼気・吸気・転換点は人差し指・薬指小指・中指に映る。

・三分節化された組織との対応：

○人差し指・中指：
神経・感覚、思考・知覚、触覚、指し示す行為（上・下・水平）。
爪噛みはここから始まり、硬化への抵抗や神経優位を示す。
治療オイリュトミーで近視・斜視に効果。

○薬指・小指：
リズム・感情、内面化、愛（結婚指輪）、指揮者の繊細な表現。
遠視傾向の内面化エクササイズに用いる。

○親指：
代謝・意志、拳の主導、乳児の握り・指しゃぶり、退屈時の親指回し。

・爪の三分節化：
先端（死んだ部分＝神経）、
本体（ピンク＝リズム・血液）、
ルヌラ（根元＝代謝）。親指でルヌラが最も目立つ。

・調和と祝福：
祝福の身ぶりで思考（人差し指・中指）、
感情（薬指・小指）、意志（親指）が統一される。
レオナルドやシュタイナーの像、『岩窟の聖母』などに見られる。

・自我の統一：
手のひら中心（しわの交差点）が最も敏感で、握手や視覚障害者の知覚の核。
十字架の釘はこの中心を貫き、復活では手が自由に天へ開く。
自我が肉体を満たし、重力から解放される象徴。

●本文

〔I〕

手の多様な形に対して、自然な仕組みを当てはめることができるようになれば、すぐにでも、分かりやすい「手の観相学」へとたどり着くことができます。まず注目したいのは、手は腕の終わり（末端）として捉えるべきだということです。このようにして、手は体の中央の部分に組み込まれるべき場所に属しています。

ルドルフ・シュタイナーの考え方によれば、人間はその姿において「三つの部分から成り立つ存在（三分節化された組織）」として見られなければなりません。これについての詳しい内容は、例えばルドルフ・シュタイナーの著書『魂の謎について』で見ることができます。私（著者）も、その本を土台にして、顔の観相学の研究書『顔は人間を明らかにする』を書きました。

ここでは、この「中央の」人間が、リズムを整える臓器とつながっていることをお伝えするだけで十分でしょう。心臓と肺は、血液のめぐりと呼吸という、二つのリズム活動の中心になっています。腕と手は、ある意味で、この中心の場所から外側へと広がっているのです。

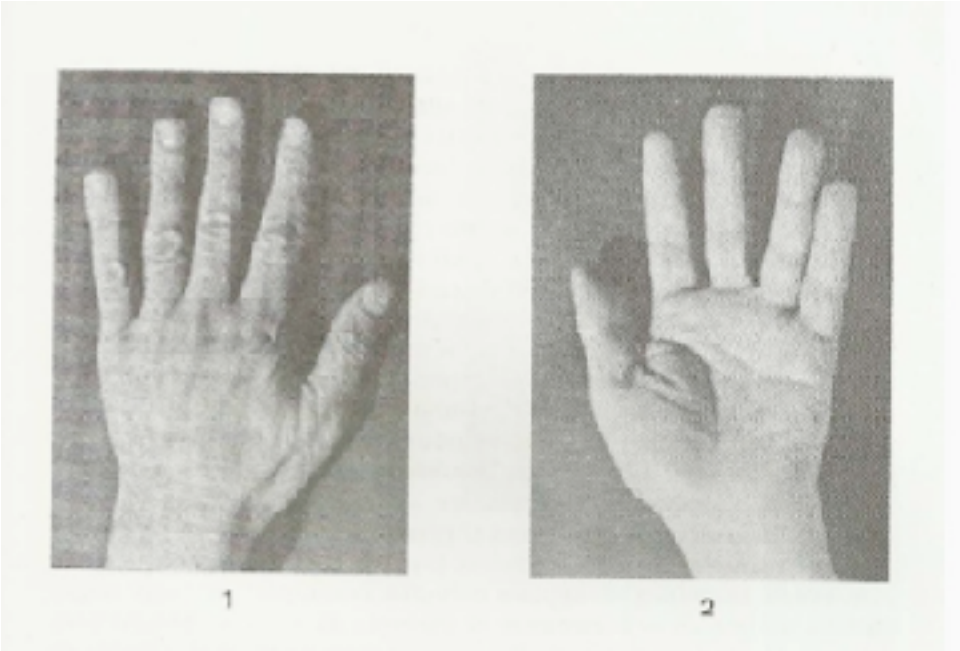
手は自由に動かすことができます。ふつうの姿勢のとき、例えば下を向いている足のように地面につくことはありませんし、頭のように明らかに上を向いているわけでもありません。一般的に、手が活動する場所は、たとえ深く掘ったり、上へ押し上げたりできるとしても、より中央の、横のあたりになります。

手とリズム器官（呼吸や血液循環）との結びつきを考えると、そこには、呼吸や血液循環に見られるような、はっきりとした「二分組織」が現れてきます。

手の甲や指、あるいは手のひら（図1と2）を見てみると、そこには常に、ある「二つの分かれ方」が見て取れます。一方は小指から人差し指までの4本の指と、それにつながる手の部分です。もう一方は親指と、そ

の付け根のふくらみ（母指球）です。手の片方の半分、つまり4本の指がある側は「呼吸器系」に生きる人間と結びついており、もう一方の親指の側は「血液循環」に生きる人間と結びついています。

※（図1と2）



呼吸と血液循環の状態は、私たちの手の皮膚にとてもよく現れています。例えば、呼吸が浅くなると血液が滞り、すぐに爪の下が青っぽくなります。それと同時に、皮膚の色も変わってしまいます。私たちが暑さを感じるときは、顔が赤くなるだけでなく、手も赤くなります。貧血などで血液の中の鉄分がとても少なくなると、爪を見れば、その下を流れる血液の青白さが分かります。

呼吸が苦しくなり、そのために血液のめぐりが悪くなるような特定の病気では、しばらくすると、指の第一関節（指先）が腫れ上がり、爪が大きく丸く盛り上がってくることがあります。このような現象に関係する病気は、すべて胸の中で起こっています。つまり、リズム人間の中心的な臓器である「肺」と「心臓」がある場所です。

医学で「バチ状指」（図3）と呼ばれるこのような形が現れる病気には、以下のようなものがあります。

※（図3）



・空洞ができるタイプの肺結核
・肺膿瘍や肺壊疽
・気管支の広がり（いわゆる気管支拡張症）
・胸膜のすき間の膿
・生まれつきの心臓の病気（チアノーゼの赤ちゃん）

また、肺動脈が狭くなっている場合には、爪がまるで鳥のくちばしのように、カギ型に曲がることがあります。爪を除けば、こうした形の変化は指の骨ではなく、柔らかい組織だけに起こります。そして、原因となっている病気が治ると、指の変形も元の形へと戻っていきます。

このような病気のプロセスは、手と「胸の中の臓器（胸腔内器官）」との間に、直接的なつながりがあることをはっきりと示しています。これらの病気では、血液が滞る現象と、呼吸が苦しくなる現象の両方が一緒に起こるため、指の変化を考えるときには、リズム人間のこの二つの働き（呼吸と循環）を切り離して考えてはいけないのです。

〔II〕

分かりやすくするために、これら二つの部分を「指の手」と「親指の手」と呼ぶことにします。この二つの違いは、他のさまざまな現象からも見分けることができます。それをお話しする前に、生理学の視点から、次のことに注目しておく必要があります。

呼吸の器官は、たしかに「リズム組織」に属していますが、そのプロセスの面では「神経の働き」にとても近いところにあります。つまり、神経系と深い結びつきを持っているのです。このことは、私たちの「意識」の現れが、神経の組織と広く結びついていることにも現れています。意識は呼吸のなかにまで入り込んでいるため、私たちはある程度、自分の意志で呼吸をコントロールすることができます。

また、呼吸器の粘膜にある神経は、非常に高い感受性を持っています。これが過敏になりすぎて、とてもつらい症状として現れるのが、例えばいわゆる「花粉症」です。花粉症になると、呼吸の領域において、まるで「感覚器官」の働きを思わせるようなことが起きているのを直接感じることができます（粘膜が花粉や匂い、チリなどを感知するのは、皮膚が物のザラザラ感を触って感じたり、鼻が匂いを感じ取ったりするのとそっくりです）。この点において、呼吸の働きと神経の働きは、とても密接に結びついています。

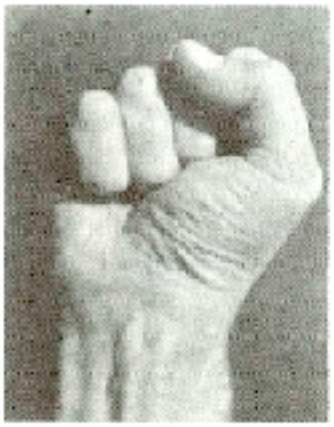
3つの関節を持つ4本の指がある「指の手」は、何よりもまず、この「呼吸する人間」と深い関係があります（それぞれの指についての詳しいお話は、後ほど行います）。神経の組織と指との結びつきは、指先、特に人差し指と中指の「触覚」の素晴らしい鋭さを見れば、すぐに分かります。指先の触覚はとても繊細なため、例えば目の不自由な方においては、まるで目の代わりとなるような、立派な感覚器官が作り上げられます。この触覚に結びついた神経系は、ときとして奇跡と思えるほどの完璧さに達します。この「触って確かめる」という行為に参加するのは、あくまで「指の手」の指たちであり、親指はそこには加わりません。

一方の「親指の手」は「循環の人間」に属しているため、隣にある「代謝組織」と密接に結びついています。代謝組織が、常に人間のあらゆる「意志の要素」の土台になっているのと同じように、親指とその付け根のふくらみ（ここには顔の赤みがそのまま映し出されることが多いです）は、人差し指のような「知覚」よりも、手の「意志の働き」と強い結びつきを持っています。この「親指の手」が血液のリズムと親戚関係にあることは、まさに親指のふくらみから手首へと下りていった場所に、何千年も前からお医者さんが人間の脈拍を感じ取ってきた「橈骨（とうこつ）動脈」があることからも、ひとつの証明になるかもしれません。

手の「二つの分かれ方」に関係する、いくつかの「身振り」を深く見つめることで、手をより理解することができます。ここでは、正反対の二つの動きを思い出してみましょう。

まず、人間の体の中で、熱を帯びた血液が激しく湧き立ったとします。心臓はふつうより激しく打ち、頭は赤くなって熱くなります。このようなイライラや怒り、激怒が爆発して最高潮に達したとき、人はよく拳を固く握りしめたり、その拳で相手を脅したりします。この拳をつくるとき、人はまず3つの関節を持つ4本の指を内側へ強く巻き込みます。そして、その上に親指をかぶせて、他の指（兄弟たち）を上から抑えつけます。この4本の指たちは、より冷静で思慮深く、「冷たい呼吸」と密接に結びついているため、頭（思考）と親戚関係にあります。このとき親指は、あらゆる反抗を力ずくで抑え込もうとする「暴君」のような姿勢をとっています（図4）。ここには、意志の行き過ぎた動きが現れています。

※（図4）



4

これとは全く逆の、心の内面を表す姿勢があります。怒りのときのように自分を見失うのではなく、少しじっくりと考え、自分の内側へと深く入り込みたいときです。一つの考えをしっかり理解しようとして、自分のなかに閉じこもる状態です。そのような瞬間、人の手を観察してみると、片手（ときには両手）で次のような身ぶりをしていることがよくあります。親指を手のひらのなかに隠すように丸め、残りの4本の指がそれを強く包み込むように握りしめるのです（図5）。

※（図5）



5

この姿勢は、あまりにも頻繁に、また引きつったように行われることもあります。その場合、それは「じっくり考える」という美徳というよりも、「できるだけ多くのものを自分のなかにしまい込んでおきたい」という執着を表すようになります。例えば、この姿勢によって、秘密を隠したがる癖があることや、より物質的

なものに心が向いていることケチな性質がうっかりバレてしまうことがあります。そのような人は何も与えたがらず、世間でよく言い得て妙と言われるように、「手が固い（財布の紐が固い）」状態になります。また、朝起きたばかりで、まだ何の活動も起こそうと決めていない人が、同じように親指を他の指で覆い隠しているのを見ることもあります。これは、意志の力がまだ外側に向かって働いていない状態を示しているのです。

次に続く話から、「指の手」がどれほど呼吸する人間と深く関わっているかを、さらに詳しく知ることができます。

呼吸というものは、順番に起こる3つの出来事から成り立っています。それは「息を吐くこと（呼気）」、「息を吸うこと（吸気）」、そしてその間にある「呼吸の合間」です。この移り変わりの瞬間は、まるで一時休止のように思えるかもしれませんが、規則正しい呼吸の中では、時間としてはほとんど気づかないほどのものです。これら3つの出来事は、4本の指の「形」と「働き」の中に映し出されています。

息を吐くとき、人間は自分の存在の一部を伴って自分自身の外側へと出ていきます。ただし、それは目にはほとんど見えません。人間は周りの環境と結びつくのです。この現象は、人差し指に生きている性質と深く一致しています（このことについては、すでに一部お話ししました）。人差し指は、目に見える形で外の世界へと深く入り込み、外の世界と結びつく働きをします。

息を吸うときは、これとは逆のことが起こります。息を吸うとき、私たちは空気を体の中に吸い込むだけでなく、自分自身の存在のすべてを内側へと向かわせます。これはいわば、本当の意味での「内面化」であり、私たちの心がすべての感情の中で感じ取るものと同じです。手においては、この内面の体験が薬指と小指に映し出されています。これについては、後ほど明らかになります。

しかし、これら二つの出来事の間には、息を吐くことから吸うことへ、また逆に吸うことから吐くことへと切り替わる「移り変わりの瞬間」も考えなければなりません。呼吸の休止がはっきりと測れるのは、呼吸が激しくなったり弱まったりしたときだけであり、ふつうは途切れることなくスムーズに移り変わります。それでも、この切り替わりのポイントを意識することは重要です。例えば、空気中の酸素を多く消費しているときは、吐くことから吸うことへの切り替わりが早くなりますし、消費が少なければ切り替わりは遅くなります。そのため、普段は測るのが難しいこの移り変わりの瞬間に、呼吸のプロセスにおける本当の「平衡」が形作られているのです。手において、この「外側と内側の平衡」を保っているのが、中指です。中指は、解剖学的に真ん中にあるだけでなく、常にバランス（調和）を作り出す能力を持っています。中指は必要に応じて、人差し指の側（外側）に傾くことも、薬指の側（内側）に傾くこともでき、それによって形や動きに調和をもたらします。このことは、後の章でそれぞれの指について具体的に説明するときに、さらに明らかになるでしょう。

〔Ⅲ〕

手を観察するときに、主に「リズム人間」に焦点を当てるのであれば、手を「二つの部分（二分組織）」に分けて語ることは完全に正しいと言えます。なぜなら、中央の人間は、呼吸と血液循環という二つの重要なプロセスを土台にしているからです。

しかし、ルドルフ・シュタイナーによれば、体全体の構造には区別すべき「三つの領域」があります。

１）頭と感覚器官を伴う「神経・感覚システム」

２）先ほど述べた「リズムシステム」

３）そして3つ目が、その名の通りである「代謝・運動システム」です。

これら3つの器官システムは、それぞれ心の活動である思考」、「感情」、「意志」の土台にもなっています。この「体と心の三分節化された組織」は、同じように手の中にも映し出されており、それが指の現れ方から見て取れます。

「思考」と「知覚」は、神経のプロセスと結びついているため、主に人差し指と中指に映し出されます。これら二つの指に、最も繊細な触覚が存在していること（、あるいは練習によって鍛えられること）に疑いの余地はありません。いわゆる「指先の勘（繊細な感受性）」は、この二つの指の先端にこそ、本当の故郷を持っています。ここでは、目の不自由な方が努力して行うように、指先が目の代わりを最も果たしやすい場所なのです。

もし、外の世界で気づいた何かを、手を使って誰かに教える必要があるとき、他のどの指でもなく、まさに人差し指がその対象をはっきりと指し示します。獲物を待ち伏せして動物を撃とうとする猟師は、人差し指を引き金の上に置いておき、適切な瞬間にそれを引きます。この場合、まさに「目」と「人差し指」が完全に調和して働いているのです。

人差し指（第2指）で指し示すという行為は、3つの方向（意味合い）において行うことができます。

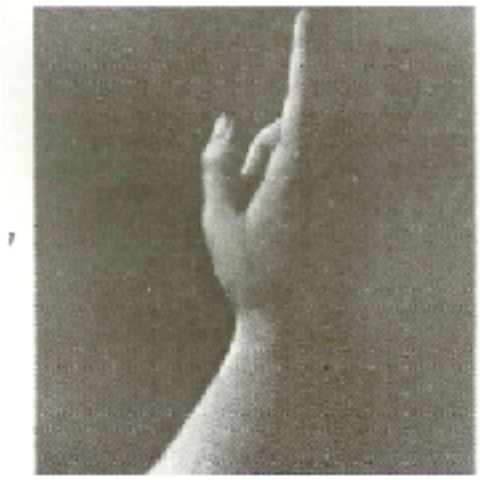
例えば、思考の中に重要なことが浮かび上がったために、上を指し示すことがあります。レオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』では、トマスが意味ありげに人差し指を上へと突き出しているのが見られます（図6）。たしかに指は重要な何かを指していますが、その動きはどこか抑え込まれている（ためらっている）ように見えます。トマスの心の中には疑いがあり、その背後には疑い深い性質が潜んでいます。そのため、絵の中の身ぶりには、どこか窮屈さが現れているのです。

※（図6）



しかし、上を指し示す身ぶりは、力強いものにもなり得ます。何か非常に偉大で、神聖なものへと人々の注意を向けさせようとする場合です。同じくレオナルドの絵では、洗礼者ヨハネの右手の人差し指が上（天）に向けられています（図7）。ヨハネは指で天を指し示しています。そこから、彼が預言者として告げることになる「救世主（キリスト）」が降りてこられるのです。この指によって、人間はより高い次元へと目を向けさせられます。

※（図7）



「『私のあとに来られる方は、私よりも勝った方である。私よりも先におられたからである』と私が言ったのは、この方のことです。私たちはみな、この方の満ち満ちているものの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。」
（ヨハネによる福音書 第1章15-16節）

上を指すこととは対照的に、地球上のすべてが堕落の極みに達していることを表現する必要があるとき、人差し指は下を指し示します。

「まむしの子らよ、迫り来る神の怒りから逃れられると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ……」
（マタイによる福音書 第3章7-8節）。

これらは、ヨハネがファリサイ派やサドカイ派の人々に向かって叫んだ言葉です。レオナルド・ダ・ヴィンチは、人々に訓戒を与え、威厳に満ちた厳しさをもって、人差し指をまっすぐ地面（下）に向けている洗礼者ヨハネの小さな素描を描いています（図8）。

※（図8）



さらに、この偉大な画家は、人差し指（第2指）の3番目の位置をも細心の注意を払って探し出しました。それは、人差し指をきっちり水平（前）に向ける位置です。水平の高さは、心臓とともに「リズム人間」が属している胸（上肢）の領域です。すべての優しい愛は、この領域から湧き出ます。

レオナルドの『岩窟の聖母』（ルーヴル美術館にあるパリ版）では、幼子イエスの傍らに座る守護天使が、深い祈りを捧げている幼いヨハネを示すために、人差し指をまっすぐ前へと伸ばしています。これは、子どもに対して何か大切なものを気づかせるときの、まさに正しい身ぶりとして感じ取ることができます（図9）。

※（図9）



〔IV〕

それぞれの指が持つ独特の構造については後ほど触れますが、ここでは、人差し指と中指がとても頻繁に痛めつけられる「ある習慣」について、少しお話を挟んでおきましょう。

それは、現代において、特に子どもの間で驚くほど広がっている「爪を噛む癖」についてです。観相学の第1巻でも説明した通り、このようなケースでは、体の中の「硬化しようとする力」に対して、無意識のうちに抵抗しようとする強い衝動が現れています。爪を噛む人は、自分の体の中で最も硬い部分の一つ（それより硬い骨には手が届きません）を切り離そうとしているのです。だからこそ、爪を噛んでしまいます。

ここで、神経のプロセスと、体に現れる「こわばり」や「硬化」との間には、密接な関係があることを知っておく必要があります。神経の活動がより強く働くと、生命の生き生きとした成長のプロセスは常に弱められてしまいます。例えば、神経細胞を肝臓の細胞と比べると、その生命力は割合として非常に低いものです。このことは指先にも現れています。神経が豊富に集まっているため非常に高い感受性を持つ指先は、硬い爪によって覆われています。例えるなら、神経系の中で最も重要で複雑な器官である「脳」が、大きな頭蓋骨によって包まれ覆われているのと同じように、極めて神経が豊かで敏感な感覚器官である指先の上には、小さな規模で、硬く曲がった爪がまるで「小さな頭蓋骨」のように乗っている、と言うことができます。少し想像力を膨らませるなら、人間は手の先に、それぞれ小さな脳を持ち、爪という角質でできた頭蓋骨をかぶった「10個の小さな頭脳」を携えている、と考えることも許されるかもしれません。

爪を噛む人たちに尋ねてみると、その多くが「決まって人差し指と中指から噛み始める」と答えるのは注目に値します。こうした人々は、大抵の場合、精神的な要求（たとえそれが軽いものであっても）を突きつけ

られると、体に不調を感じてしまうタイプの人たちです。症状がひどくなると、目覚めている状態のちょっとした刺激が、すべて爪を噛むきっかけになってしまうことさえあります。

例えば、子どもたちがどんなときにこの習慣に逃げ込むかを調べてみると、彼らはこう説明してくれます。「お腹が空いたとき（人間は空腹になると頭がより冴えます）」、あるいは「ベッドに横になっても、なかなか眠れないとき」などです。これらの状況は、大人の爪噛みにも当てはまります。大人の場合は、さらに「どうしても頭から離れない特別な悩みごと」が、爪を噛む大きな原因になります。爪を噛むという行為は、無意識の、そして本能的な「意志の生活」から湧き出る衝動であるため、やめさせるのが非常に難しいのです。

しかし、最初に人差し指と中指が狙われるのには、きちんとした理由があります。すべての指の中で、この二つの指が「神経・感覚システム」と最も強い結びつきを持っているからです。

経験が教えてくれるように、爪噛みを治そうとする多くの試みは、あまりうまくいきません。ですが、いずれにせよ、この習慣には二つの側面からアプローチすることができます。

一つ目は、本人の「意志」の側面からアプローチする方法です。これは、自分の意志をよりはっきりと意識することに関係しています。大人に対しては、定期的な「意志の訓練」が推奨されます。これについては、例えばルドルフ・シュタイナーの著書『いかにして高次の世界を認識するか』の中に見出すことができます。子どもの場合は、教育者が特別な配慮をして、子どもに仕事や遊びを与え、適切な食事を摂らせる必要があります。心の面においては、「恐怖による緊張」や「退屈」を徹底的に避けなければなりません。

あるいは、精神的な側面から、思考を「抽象的なレベル」から、より「具体的でイメージ豊かな（絵画的な）レベル」へと引き上げてあげることも大切です。芸術的に生き生きと行われ、無味乾燥さから解放された教育は、どの子どもであっても、少なくともしばらくの間は、その悪癖（爪噛み）を忘れさせてくれるでしょう。しかし、もし教育がこのような方向で機能しなければ、満たされない衝動たちが「小さな飢えた狼」のように爪に襲いかかり、一枚の爪も残さないでしょう。その結果、指の「頭」から保護（爪）が奪い去られ、上から見るとまるで指が切断されたように見える手になってしまうのです（図10）。

※（図10）



爪を噛むある少年の例を挙げると、ここで言いたいことがより分かりやすくなるでしょう。

彼は13歳で、物心ついたときからずっと爪を噛んでいます。髪の毛は際立って赤く、顔色は新鮮なピンク色をしています。かつてルドルフ・シュタイナーは、赤毛の人においては「硫黄のプロセス」が（例えばタンパク質の中で）特に活発である、と言及したことがあります。大抵の場合、赤毛の人は髪の毛の色が濃い人に

比べて汗をかきやすく、代謝のプロセスがより早く進み、血液が頭へと急に昇りやすい傾向があります。その結果、この少年がそうであったように、簡単に怒りの発作を起こしやすくなります。

彼の両手の関節は非常に柔らかく、まるで乳幼児の手のようです。皮膚には少しも硬さがありません。彼は――もちろん無意識にですが――自分の体の心地よい柔らかさの中に、できるだけ長く留まっていたいと願っているのです。この傾向から、彼は指にある「硬い部分」を取り除こうとして、破壊的なほどに爪を噛んでしまいます。彼の爪の長さは、健康な爪の半分近くにまで縮んでしまっています。

また、単純に否定し去ることのできない、興味深い考え方として次のようなものもあります。

このような爪噛みの人の体質全体には、ある種の「硫黄への渇望」があるのではないか、ということです。これは、他の人よりも明らかに「塩」を強く欲しがる人がいるのと同じです。「ケラチン」は爪の主要な成分であり、比較的高い割合（約25%）で硫黄を含んでいます。もしかしたら、硫黄に飢えている体が、爪を噛むことでその欲求を満たそうとしているのかもしれません。その際、摂取される物質の量が特に多くなければならない、と考える必要はないでしょう。

爪を噛む人間と完全に正反対なのが、「爪を異常に長く伸ばすこと」を好む人間です。これによってその人は、自分の中で働いている「硬化させる力」を愛していること、そしてそれを周囲に見せつけたいと思っていることを露わにしています。医師ハインリヒ・ホフマンが有名な絵本『もじゃもじゃペーター（ずぼらな少年）』の中で描き、表現したような、強情で言うことを聞かない子どもは、当然の結果として、そのいたずらっ子が切らせようとしない、非常に長い爪を持っているのです（図10a）。

※（図10a）



10a

〔V〕

このように、爪がある指先（末節骨）は、より広い意味において、人間と「形づくるプロセス（硬化するプロセス）」との関係を示しています。そして、そのプロセスの出発点となっているのが「神経・感覚システム」です。

ここまでの観察を踏まえて、人間の「三分節化された組織」と、それに対応する「心の動き」の現れを、もう一度手の中から見つけてみましょう。

これまでのさまざまな例が示しているように、人間を導く指であり、思考や知覚を担う指は、何よりもまず人差し指です。そして、これからお話しするように、一部は中指もその役割を持っています。

例えば、私たちが深く考え込もうとするとき、そのための中心点が、鼻の付け根の上、ちょうど左右の眉毛の間にあるように感じられます。この場所には、観相学の視点から見ても、額のしわが下に向かって寄るという変化がはっきりと現れます。このようにして、人は大抵の場合「考え込んでいる」と表現されるような表情になります。深く考えたいとき、その人は心の中でも、自分自身の中心点へと引きこもっているのです。「集中する」という言葉は、まさにこうした活動を言い表したものです。

そして、集中するまさにその瞬間に、人差し指をその鼻の上の場所に当てる人がどれほど多いことでしょう！たとえ他の指がたまたま一緒に動いていたとしても、そこでは人差し指が主役を務めているのです。

また、世界の騒がしさから身を引きたいときに、人が行う身ぶりがもう一つあります。自分自身をじっくり振り返る必要があり、言葉によって破られてはならない静けさが支配すべきときです。落ち着きがなく、おしゃべりな子どもたちに対しても、先生が伝えたいことをしっかりと聞かせたいときに、このような身ぶりをすることがあります。人差し指を上へと向け、口の真ん中に当てることで「静かに」という合図を送るのです。この姿を、フラ・アンジェリコ（中世イタリアの画家）以上に豊かに表現した人がいるでしょうか（図11）。

※（図11）



11

その他にも、心（感情）よりは頭（思考）に向けられたいくつかの動きから、この「第2指（人差し指）」がときには中指を伴いながら、指し示すこと、注意を引くこと、そして考えることと常に結びついていることを見て取ることができます。

誰かが本当にばかなことをしたときに、その仲間が「あいつは頭がどうかしているぞ」と短い身ぶりで示したいとき、右手の人差し指で、左の肘をトントンと叩くことがあります。これによって、「あいつはまともな判断力が頭から滑り落ちて、下の方へ消えていってしまったんだ」ということを表現したいのです。ここでも重要なのは、頭の力（知性）に関わる場面において、やはり人差し指がリーダーシップを取っているという点です。

また、ある地域では、誰かが本当に愚かな真似をしたときに、次のような方法でその人をからかう習慣があります。他の指は握り込み、左右の両方の人差し指（左手は左側、右手は右側）だけをまっすぐ伸ばして、

それぞれのこめかみに向け、そこで指を小さくクルクルと回転させるのです。これによって、「お前は頭のネジが数本緩んでいるに違いない」ということを伝えることができます。

〔VI〕

人差し指と中指が、あらゆる知覚のプロセスや、想像力・思考の力と深い親戚関係にあるということは、教育や治療の面でも重要な意味を持っています。

ルドルフ・シュタイナーの指示と、それを発展させた「治療オイリュトミー」の実践を通じて、何年にもわたり、あることが証明されてきました。それは、これら二つの指、特に人差し指を使ったとても具体的なエクササイズを行うことで、いくつかの種類の「斜視」や、とりわけ「近視」に対して、驚くほど良い影響を与えることができるということです。

このことは、私たちの文脈において非常に重要な意味を持っています。なぜなら、まさに「思考の指」「知覚の指」である人差し指が、適切な訓練を行うことによって、目という感覚器官を治療する力になり得ることが、ここからはっきりと分かるからです。

人差し指の特定のエクササイズが近視に効果をもたらすという理由は、もう一つの意味でも、非常に注目に値します。人差し指というものは、その本質において、常に「周りの世界（環境）」を指し示そうとする性質を持っています。外で起こっているすべてのことへと、まっすぐ向かっていく性質です。

ところが、近視の人には、これとは全く逆の傾向があります。近視の人は、自分の殻の中に閉じこもる傾向があるのです。外の世界にあまり興味が持てないため、外の世界に直接目を向けようとさえしなくなります。

ですから、近視の人を治療するときには、その人が常に隠れようとする「自分自身の殻」から引っ張り出してあげるようなアプローチが必要である、ということは完全に納得がいきます。そして、その本性として常に外へと動き回りたがっている「人差し指」を使ったエクササイズは、そのために非常に適した方法になるのです。

これらの、指の中における「思考する者（思想家）」や「感知する者（予言者）」たち（人差し指や中指）と完全に正反対の位置にあるのが、親指です。親指の中には、人間の「意志の要素」が、そしてこれと結びついた「代謝のシステム（消化や吸収の働き）」が露わになっています。

先ほどお話しした「固く握りしめられた拳」において、その導き手となる力を握っているのは親指です。まだ生まれたばかりの非常に小さな子どもにおいては、体の形をつくるプロセスと代謝のプロセスが、最も重要な役割を果たしています。ルドルフ・シュタイナーはかつて、乳児がどれほど自分の意志の性質（本能的な力）に基づいて生きており、またその意志の力から乳児という存在を理解することができるかを、生き生きと表現しました。

これがとても微笑ましい形で現れるのが、赤ちゃんが一心不乱に母乳を吸いながら、同時にその小さな拳をぎゅっと固く握りしめているときです。多くの子どもたちは、ベッドに横になって眠っているときでさえ、まだそのポーズを保っています。しかし、赤ちゃんがお腹を空かせて目を覚まし、泣き叫ぶとき、その泣き声のリズムに合わせて、手が開いたり、再び拳へと閉じられたりするのをよく目にすることでしょう。そのとき手は、お互いに影響し合うようにして、4本の指が親指を外側から包み込んだり（「内面にこもる姿勢」の

ように）、今度は親指が再び4本の指の上にかぶさったり（「怒りの姿勢」のように）という動きを繰り返します。

この親指と代謝の現れとの結びつきは、新生児の本当に早い時期において、まさに「親指」だけが口に吸い込まれる（指しゃぶりされる）という事実からも確かめることができます。生まれてすぐの最初の頃は、おそらくすべての指をいっしょくたに口の中に入れている様子が見られますが、これは比較的すぐに変化し、その後は親指だけを吸うようになります。

子どもはお腹が空いたときに指をしゃぶりますが、お乳を飲んだ後にも、すぐに親指を唇の間に差し込みます。ミルクを飲むことで体全体に感じられた心地よい満足感を、手放したくないのです。ここで私たちにとって特に興味深いのは、他のどの指でもなく、まさに「親指」がそのために選ばれているという点です。親指は代謝の活動に属しているため、赤ちゃんは、普段なら母親の胸や哺乳瓶が与えてくれるすべてのものを、ただ純粋に自分の親指から吸い続けようとしているのです（おしゃぶりは、その両方の代わりを務める劣った代用品にすぎません）。ですが考えてみてください、世間では常に「親指しゃぶり」と言われますが、「人差し指しゃぶり」と言う人は誰もいませんよね！

もう一つ、何よりも親指に関わりの深い、特に挙げさせておくべき動きがあります。静かに座っているとき、退屈しているとき、あるいは何らかの理由で眠れないとき、人は普段それにまったく気づくことなしに、静止してしまっている自分の肉体や心に活力を与えようと試みます。挫けそうになっている意志の力を、もう一度奮い立たせたいのです。

このような状態のとき、人間はよく何をするでしょうか？それは、両方の親指を、お互いの周りにクルクルと回転させ始める（親指を回す）ことです。この動きは、他のどの指でもなく、人間の「意志の組織」に最も近いところにある、まさに親指だけで行われます。ですから、このいわゆる「親指回し」の仕草の中には、実は「退屈」に対する極めて意味のある治療が隠されているのです。

これと同じように、木製のビーズを通した数珠やネックレスを指の間でサラサラと滑らせる行為も挙げられます。特に東洋の人々は、例えば一人でいるときや、眠気を払いたいときに、この仕草を好んで行います。この動きは、ほとんど親指だけで行われ、親指が驚くべき速さでその小さな球を次々と押し出していくのです。

〔VII〕

人間の二つの極――「神経・感覚システム」の人間と、「代謝システム」に結びついた人間――の間に、「リズム人間の領域」が生きています。この領域が、私たちの「感情（感受性）」の世界の土台を作っています。

手において、この胸の領域の活動が映し出されているのが、何よりも薬指と小指です。薬指は、最も美しい意味での夫婦の愛のシンボルとして、金の「結婚指輪」をはめます。また、多くの修道会の修道女たちも、一般の妻と同じ指に金の指輪をはめます。彼女たちは、神聖なる花婿（キリスト）に自らを捧げる誓いを立てたのです。これは、人間が身を捧げることができる最も高い次元の「愛」を表す、古くからのシンボルです。

これら二つの指の中に感情がどのように響き、表現を見出すかは、オーケストラの指揮者の手の動きを見れば、ときにとてもはっきりと分かります。非常に繊細なフレーズや、特に感情が豊かに込められたパートにおいて、マエストロ（指揮者）は演奏家たちに対して、薬指と小指を使いながら、心の奥底からの感情の表現を求めます。この動きは、演奏家にとって極めて自然で、無意識のうちに受け取られるものです。

これら二つの指について、より個別的に細かくアプローチしていくことで、適切な図やディテールを交えながら、第4指（薬指）と第5指（小指）がどのように感情と結びついているかをより身近に説明できるようになります。ここではまず、次の点にだけ注目しておきましょう。この二つの指、特に薬指は、人間の感情や心のあり方と密接に関係しているため、より「内側（内面）」へと向いており、いわば世界から自らを内へと引き込めようとする性質を持っています。

この二つの指が持つ独特の性質のおかげで、これらの指を使った特定のエクササイズが、外の世界にばかり気を取られて自分自身を見失いかけている人を、もう一度「自分自身へと連れ戻す」ために役立つということが理解できます。

例えば、遠視の傾向がある子どもは、常に注意が外へと分散してしまいたがることでその性質がバレてしまいます。その目のレンズは、すぐ近くのものには興味がないかのようです。治療オイリュトミーにおいて、このような遠視の子どもたちに対して行われるエクササイズは、主に、この「内面化された感情の生活」と親戚関係にある第4指（薬指）と結びついています。

また、「三分節化された組織」の考え方が、体のいかに小さなディテールにまで物理的に実現されているかについても、触れておく必要があります。

その格好の例として、「爪の構造」を挙げることができます。ここでは、解剖学的な細かい話に深く入り込むことはせず、主にその「形」に焦点を当てます。

爪には、はっきりと3つの部分を区別することができます。

１）爪の先端（白い部分）：

ここは、残りの部分とは生き生きとした結びつきを持っていません。実際には、ここは押し出された爪の「死んだ部分」であり、切ってもまったく痛みがありません。ここは「神経・感覚システム」と結びつけることができます。なぜなら、神経系については、それが生命力とはまさに正反対の位置にあるとお話ししたからです。神経物質の周辺には、しばしば硬化した物質が形作られます。脳とそれを包む頭蓋骨の関係を思い出してください。

２）爪の本体（ピンク色の部分）：

この死んだ部分に続くのが、より広く発達し、皮膚の爪床（しょうしょう）にぴったりと収まっているピンク色の部分です。この赤みは、透けて見えている血管と関係しています。見る人にとって、このエリアこそが「爪そのもの」です。ここは血液に含まれるヘモグロビンの量を映し出す鏡であり、すぐ下にある皮膚と密接に結びついているため、非常に敏感です。この爪の部分は、そのまま「中央の人間（リズム組織）」と結びつけることができます。そのため、この部分が爪の中で最も長くなっています。よく知られているように、手全体がそもそもリズムシステムに極めて近い存在だからです。

３）爪の付け根（白い半月部分）：

最後に、いわゆる爪の「根元」があります。これは親指において最もはっきりと見え、半月のようなアーチ型をしており、色が白っぽくなっています。解剖学では、その形からここを「ルヌラ（内爪半月、小さな月という意味）」と呼びます。爪はまさにここから生まれ、栄養を与えられます。この場所が傷つくと、爪の成長は止まってしまいます。したがって、ここには最も明らかな形で、爪の「代謝システム（成長と栄養）」の

領域が存在しています。すべての指の中で、親指が代謝と最も深い関係を持っているため、親指においてこの「ルヌラ（半月）」が最もはっきりと現れるのです。

〔VIII〕

ここまでは、それぞれの指が、三分節化された組織としての人間（思考・感情・意志）にそれぞれどのように対応しているかを説明してきました。

今度は、これら心の3つの動き――すなわち、考えること（思考）、感じること（感情）、欲すること（意志）――が、手の身ぶり（身振り）の中で、ひとつの調和した輝かしい統一へと集められる指の動きについてお話しします。

それは、「祝福を与えるとき」の動きです。この身ぶりは、多くの古い絵画に見出すことができます。レオナルド・ダ・ヴィンチの絵（図12）では、受胎告知の天使（ガブリエル）が、見事な身振りでマリアを祝福しています。その絵の中で、天使の手とその気高き表情とを比べてみてください。前方へと傾けられた、丸みを帯びた額のカーブは、人差し指と中指のポジションと完全に対応しています。額が神聖なる思考の力で満たされ、それによって人間のイメージが生まれたのと同じように、これら二つの指（人差し指と中指）も、まるで神聖な電流のように、天からの神聖な形（キリスト）を神の母（マリア）へと導いているのです。

※（図12）



12

内側から差し出される愛は、顔の中央部分を形づくる、鼻や頬の繊細なラインから見て取ることができます。この、すべてを包み込むような「感情（感じること）」は、薬指と小指のポジションに明確に表現されています。

そして天使は、その意志からすべてが始まった「父なる神」によって遣わされました。しかし、ここではすぐには目に見えにくいこの「意志」の力は、顔のパーツにおいては、口元や顎が少し後ろに下がっていることから、あえて抑えています。それと同じように、親指も手に隠されるように位置しています。ですが、親指は少し側面に傾きながら緩やかなアーチを描き、天から降りてくる神聖なものを優しく守っているのだ、ということを感じ取ることができます（図13）。

※（図13）



13

これら3つの指のグループがすべてそれと分かる形で、完璧な調和を保っているのが、『岩窟の聖母』（図9）の中で、幼いヨハネを祝福している幼子イエスの手です。人差し指と中指がバランスよくまっすぐ立てられ、その傍らには、愛情深く傾けられた薬指と小指が寄り添い、もう一方の側からは、しっかりと支える親指がそれを縁取っています。この指たちの「三位一体」のあり方は、空間（周囲）に対しても調和に満ちた関係を保っています（図14）。

※（図14）



14

この祝福の身ぶりは、現代において、ルドルフ・シュタイナーが作った木彫像（※彫刻作品『人間の代表者』）によって、お手本となる形で彫り込まれました。制作者によって「人間の代表者（人類の代表）」という大変ふさわしい名前が与えられたその像においても、祝福の身振りの中で、両手の5本の指がどのように「三位一体（思考・感情・意志）」へと美しく調和しながら結びついているかを、特に素晴らしい形で感じ取ることができます。

人に対して祝福を与えるということは、本質的に、その人の魂の中に生きている「思考」「感情」「意志」が、より高い次元の統一へと高められるように、その力を届けたいと願うことを意味しているのです。

なお、東洋（正教）の教会においては、祝福の際の手の形が少し異なるものが使われています。第2指（人差し指）と第3指（中指）はまっすぐ向けられたままですが、親指が薬指の先端に触れることで、ときにお互いが閉じた輪を作るような形をとります。これおそらく、東洋の教会においては、意志における「意識的な要素」よりも、親指が示す「意志」と、第4指（薬指）が象徴する「感情」との密接なコンタクト（結びつき）

が、より強調されているためだと推測されます。この身ぶりは、祝福を与える姿が描かれた、新旧ほとんどすべてのイコン（聖画）の中に見出すことができます（図15）。

※（図15）



15

このように、私たちはまず、手の中に「二つの要素（二分組織）」を見つけようと試みてきました。これは、手が腕とつながることで、血液循環と呼吸という二つの方向を持つ「リズム組織」に直接組み込まれている、と気づいたときに明らかになったものです。

そしてさらに一歩進むことで、手と指の全体が、人間の姿そのもの、およびそれに対応する心の3つの活動（思考・感情・意志）と完全に結びついていることを見て取ることができました。これによって、指と手は、明確な「三分節化された組織」として、人間の全体の中に美しく組み込まれているのです。

〔IX〕

しかしながら、人間という存在は、さらに一段と高い視点から捉えることもできます。人間に本来備わっている「精神性」、すなわち一人ひとりの「個としての自我」に目を向けてみましょう。すると、それまでいくつかに分かれていた要素が、ひとつの「統一（統合）」へと集められます。

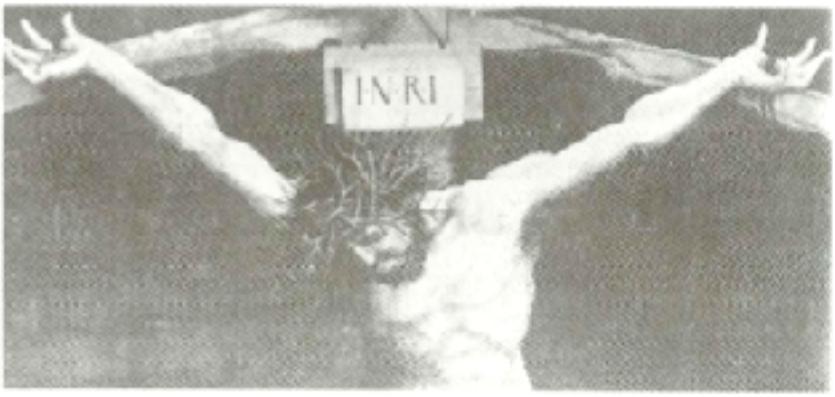
ここで、次のような問いが浮かび上がってくるかもしれません。

「この精神の統一というものも、手の中に認めることができるのだろうか？ もしできるとすれば、それはどのように、そしてどこに、目に見える形で表現されているのだろうか？」

この問いに対しては、まずいくつかの重要な事実を指し示すことなしには、答えることができません。

人間の存在の統一性が、ある意味で見事に証明されている、表現豊かな絵画がいくつか存在します。例えば、救世主（キリスト）の復活を描いた作品がそれにあたります。ラファエロの『聖体の論議（ディスプータ）』や、グリューネヴァルトの『キリストの復活』などをその例として挙げることができます。しかし、それらの絵に描かれている腕や手の動きについて触れる前に、まずは「十字架刑（磔刑）」における両手（図16）について思い出しておく必要があります。

※（図16）



16

十字架の上の両手は、その自由な動きを奪い去られています。どのようにでしょうか？それは、手を重力の力の「囚人（捕らわれの身）」にしてしまう、あの残酷な「釘」によってです。死によって重力が肉体を支配してしまったということも、非常に注目すべき事実です。この絵において、十字架にかけられたキリストの頭も同じように地球の力（重力）に屈してしまい、十字架の横木よりも下へと垂れ下がり、すでに固定されている腕や手をさらに下方へと引っ張っています。

生きているとき、頭というものはまさに、肉体を上方へと導き、自我の中に生きる精神の力によって肉体を上へと押し上げる力そのものです。人間が動物にはない「直立した姿勢」を保てるのは、まさにこの力があるからに他なりません。ですから、腕や手は、この高く掲げられた頭に従って動くものなのです。しかし十字架の絵においては、両手はうなだれた頭に従って下がるべきところを、釘によって力ずくで留められています。

ここで、釘が手のどこを貫いているかという場所が、極めて重要な意味を持ちます。鉄の釘は、手のひらのちょうど真ん中（中心）に打ち込まれているのです。この場所は、皆さんご自身の手でもより正確に確かめてみることができます。最も敏感な場所は、手のひらの内側にあります。

大抵の場合、そこには2本の横に走るしわ（手相の感情線と知能線）があり、一方は上側、もう一方は下側に位置しています。さらに、小指の側から下から上へと、中指に向かって伸びる主要なライン（運命線など）があることも多いです。このラインは、大抵、左から右（あるいは右から左）へと伸びる下側の横しわと交差しています。この交差点にこそ、先ほど述べた「手のひらの中心点」があり、そこが最も敏感な場所になっているのです。

私たちが上肢（腕や手）について考えるとき、この中心点を通じて、自分自身の「人格」のすべてを意識することができます。例えば、私たちが他の誰かと出会い、その人の「自我」に対して語りかけたい、あるいはそうしたいと心から願うとき、私たちは挨拶のために相手に手を差し出します。「心からの」握手を交わすとき、出会った二人の人間の、この手のひらの内側にある中心点同士が、お互いにとても近い位置でぴったりと合わさることになります。ここには深い意味が隠されています。なぜなら、このように表現される手の場所は、人間の「自我の重要な中心点」の一つと見なすことができるからです。

目の不自由な方々に尋ねてみると、彼らは、指先だけでなく、何よりもこの「両方の手のひらの最も内側の部分（中心）」が、自分の最も主要な知覚器官であると語ってくれます。彼らは手のこの部分を使って、例えば自分がたどり着いた場所が「美しい場所であるかどうか」までをも感じ取ることができるのです。

地球の進化の歴史において、人間の肉体を初めて完全に「人間の精神」で満たすことを許された存在であるキリストは、肉体に釘を打ち込まれるというこの出来事を、極めて苦痛に満ちたものとして体験しなければなりませんでした。しかし、精神的な存在が肉体から暴力的に引き離されるときに生じる、この上ない痛みを耐え忍ぶことこそが、キリストの使命でもあったのです。彼の敵である執行人たちは、痛みの感覚が最も強烈な場所、すなわち「手のひらの真ん中」を、喜び勇んで傷つけました。その結果、グリューネヴァルトが描いたように、頭そのものが下へとだらりと垂れ下がってしまうほどの、壊滅的な状態がもたらされたのです。

昔の画家たちは、この手とその中心点が持つ秘密を正確に知っていたに違いありません。そうでなければ、例えばジョヴァンニ・ベッリーニが、ルーヴル美術館にある絵（図17）のように、復活したキリストの「聖痕（釘の傷跡）」のある祝福の手を、あのような形で見事に描くことができたとは到底考えられないからです。その傷跡は、まさに先ほど説明した場所にぴったりと位置しています。手のひらのしわさえも、はっきりと描き込まれているのです。

※（図17）



17

やがて釘は抜き去られ、両手に縛り付けられていた精神は自由になることができました。水の中に沈みそうになった人が、波の中で腕を力強く動かして頭を上げ、自分の体を深みから引き上げるように、今や復活したキリストは、上昇（アセンション）しながら姿を現します。

この様子は、グリューネヴァルトのもう一つの絵（図18）において、おそらく最も感動的な形で体験することができるでしょう。ここでも比較のために、常にあの「十字架刑」の姿を頭に置いておくべきです。十字架刑では、頭が垂れ下がり、腕を自分の方へと引っ張っていました。しかし復活の絵では、腕は自由になり、星々が輝く天の空気の中へと深く差し込まれ、輝く太陽の後光（オーラ）の中で頭を燦然と輝かせています。そして、まるで勝利の証しのように、両手の傷跡が燃えるような赤色を放って輝いているのです。

※（図18）



18

これとは異なる方法ですが、キリストが地球の暗闇の支配からどのように脱出するかという、本質的には全く同じ叡智に基づいて、ラファエロも『聖体の論議』や『キリストの変容』の中で復活したキリストを描き、傷跡のある広げられた両手を私たちの鑑賞のために差し出しています。

〔手と指の特殊観相学〕
〔I〕親指
〔II〕人差し指
〔III〕中指
〔IV〕薬指
〔V〕小指
〔VI〕手

●基本的な視点（〔I〕～〔VI〕）

人智学（シュタイナー）とゲーテ的観察に基づき、
手・指の形・長さ・関節・爪・身ぶりを、
人間の三分節化された組織
（神経・感覚＝思考、リズム＝感情、代謝・肢体＝意志）の
外的表現として読む。

形は「生まれ持った傾向・素質」を示すが、
本人の努力や教育の結果までは表さない。

手の甲は硬化・知性・形成力、
手のひらは血液・代謝・生きた意志に対応する。

●要点（〔I〕～〔VI〕）

・親指：
他指から独立し、節が2つ。
代謝・意志・物質を掴む力に強く結びつく。
短いと意志・代謝の弱さの傾向。
母指球が力を示す。
拳の握り方や外側への開きは怒り・硬化・老年の変化と関連。

・人差し指：

観察・思考・触覚・目と近い。
3節の調和が思考・感情・意志のバランスを映す。
爪の形（平ら／鉤爪状／短すぎ）は明晰さ・本能・形成力の不足を示唆。
指差し・読書・手招きで接触を求める。

・中指：

最も長く、真ん中の節が特に長い。
リズム系の軸・最も調和した「理想的市民」。
他指の偏りを代償しやすい。
ここまで変形が出ると深刻。
教育・医療介入の指標になる。

・薬指：

感情・内面・リズムと結びつく。
人差し指と長さは近いが感覚器官的性質は弱い。
内側へカーブし、結婚指輪の指。
音楽家（特にピアニスト・指揮者）で美しく発達しやすい。
短いと感情・循環の困難の傾向。

・小指：

薬指と対で感情の鏡。
対立筋があり親指と共通点。
短い・内側へ曲がる変形はリズム系の弱さ、衝動の支配、
治療教育が必要な子ども、近視・ヒステリー傾向などと関連しやすい。
小指を立てる仕草は欲望の隠蔽を示す。

・手全体：

萼のように指を放射する土台。
五角形（五芒星の基盤）がエーテル体・生命形成力を象徴。
手のひら＝血液の生命、手の甲＝呼吸・硬化。
未来・純化された自己の象徴として読む。

形と身ぶりを合わせて観察することが重要で、
図式的診断ではなく本質を見る眼が求められる。

●本文（〔I〕親指〜〔III〕中指）

第1章で説明した手と指の観相学の基本をベースにして、ここからは一般的な見方から、より具体的な見方へと進んでいきましょう。それぞれの指や手を一つずつ詳しく観察することで、その特徴がよりはっきりと見えてきます。

〔I〕親指

手の甲側から親指を見たときに一番目につくのは、親指が他の指の並びから明らかに離れて、独立しているという事実です。

一番の大きな違いは、他の4本の指が3つの関節（3つの骨の節）でできているのに対して、親指は目に見えて2つの節だけでできている点です。爪が生えている親指の先（末節骨）は、他の指の指先とは違った印象を与えます。

長さとしては、一般的に人差し指の最初の節（基節骨）の上側の境目あたりまでしか届かず、その長さはだいたい同じくらいです（図19）。

一方で、親指の2番目の部分、つまり親指の最初の節は、人差し指の付け根の骨（中手骨）の横あたりに位置しています。

さらに注目すべき点は、人差し指から小指までの手のひらの骨（中手骨）は外からはほとんど見えない（手のひら側からはその形が全く分からない）のに対して、親指の付け根の骨は、常に最初の節と連動して重要な役割を果たしているということです。この2つの骨の動きは、外からでも簡単に目で追うことができます。

親指の先（爪のある節）は、他の指に比べてずっと低い位置にあります。しかし、間違いなく「指からなる手」の先端グループ（末節骨の並び）に属しています。

なぜなら、他の指先と同じように爪が生えており、神経や感覚のシステムとも同じようなつながりを持っているからです。ただし、親指は他の指に比べて「触覚」はあまり発達していません。

親指の先も、他の指先と同じように丸みのある形（骨の頭の部分）をしています。ですが、他の指とは根本的な違いがあります。親指の先は、形がより太くてがっしりしており、繊細さには欠けます。爪も他より横に広く、縦にも長いです。

両手を水平に出したとき、他の指の爪はすべて上を向くのに対して、親指だけは斜め下を向くのが分かります。

また、爪の付け根にある「半月」という三日月のような白い部分が、親指は他の指よりもずっとはっきりと見えます。ここは前に述べた通り、爪が新しく作られて伸びていく場所です。

このように成長に関わる場所が、まさに親指で一番目立っているのは不思議なことではありません。なぜなら、親指は「代謝」と深い関係があるからです。親指の爪は、すべての指の中で最も力強く発達しています。

親指は、感覚の役割が最小限に抑えられており、その代わりに「力を出すこと」に向いています。親指は、目に見える形あるもの、地球上にある物質をしっかりと掴み取ろうとする「意志」の力に強く従うのです。

他の4本の指は、親指よりも少し高い位置に並んでいて、どこか気品があります。それに対して親指は、手のひらのより深い部分に埋め込まれています。血液や代謝と深い結びつきがあるため、呼吸がもたらす「自由にする力」が少し足りません。親指は、より「地球上の現実的な労働」のために作られているのです。

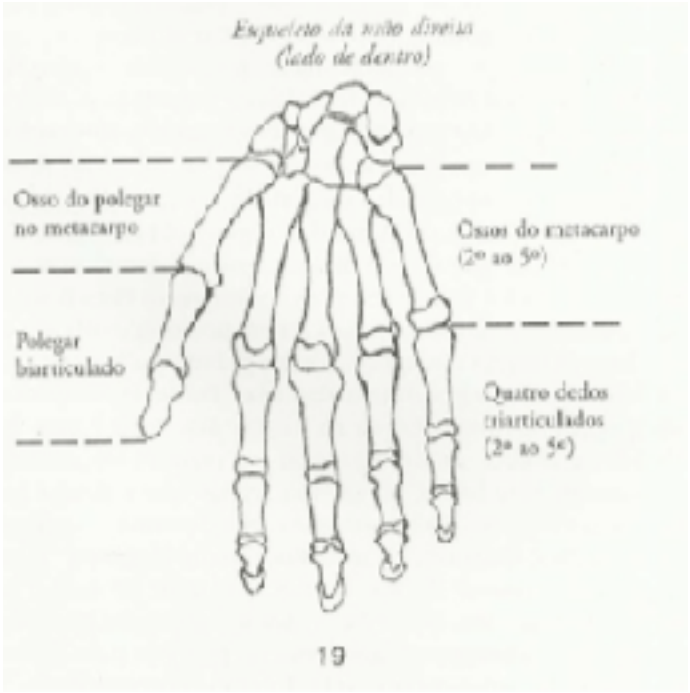
例として、バイオリンを弾く人の左手を観察してみてください。親指以外のすべての指は、自由に動いて弦を押さえ、音程を決めることができます。しかし、親指にできるのは、楽器をただ下から支えることだけです。

もちろん、これは親指の価値が低いという意味ではありません。他の指との違いを分かりやすくするための例えです。バイオリンを弾く右手（弓を持つ手）であっても、親指が音そのものを生み出すわけではありません。親指は、彼がいなければ弓を落としてしまうという、なくてはならない「必要な助手」の役割を果たしているのです。

親指の「関節としての特徴」は、その驚くべき可動性の高さにとてもよく表れています。親指の動きの広さは、他の指の関節とは比べることもできず、強いて言えば手首全体の関節に匹敵するほどです。

しかし、親指が「代謝や運動のシステム」と深く結びついていることは、関節の動きやすさや、並外れて強く複雑な筋肉の発達だけに表れるのではありません。手の骨の解剖図（図19）を見るとはっきりと分かるように、他の指には絶対にある「真ん中の節（中節骨」が、親指には完全に欠けているという点にも表れています。

※（図19）
右手の骨格（内側から見た図）



親指の手のひらの骨（中手骨）
2つの節からなる親指
手のひらの骨（第2～第5中手骨）
3つの節からなる4本の指（第2～第5指）

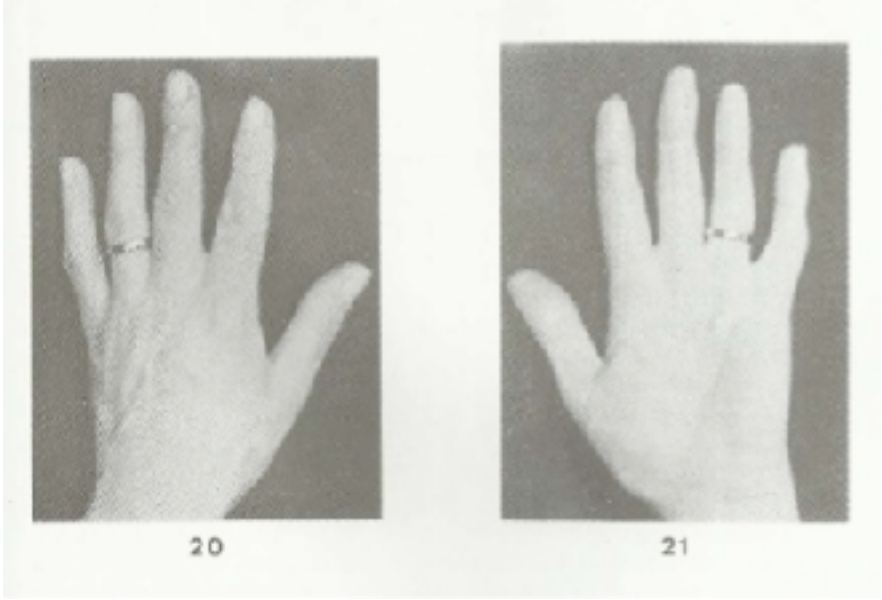
ゲーテ的な観察方法を当てはめるなら、次のように言えるかもしれません。

「他の4本の指において、真ん中の節を作るために使われたエネルギーが、親指ではあえて節を作らずに残された。その分のエネルギーは、親指を代謝系や、そこに宿る『意志』の領域へとより強く結びつけるために使われたのだ」と。

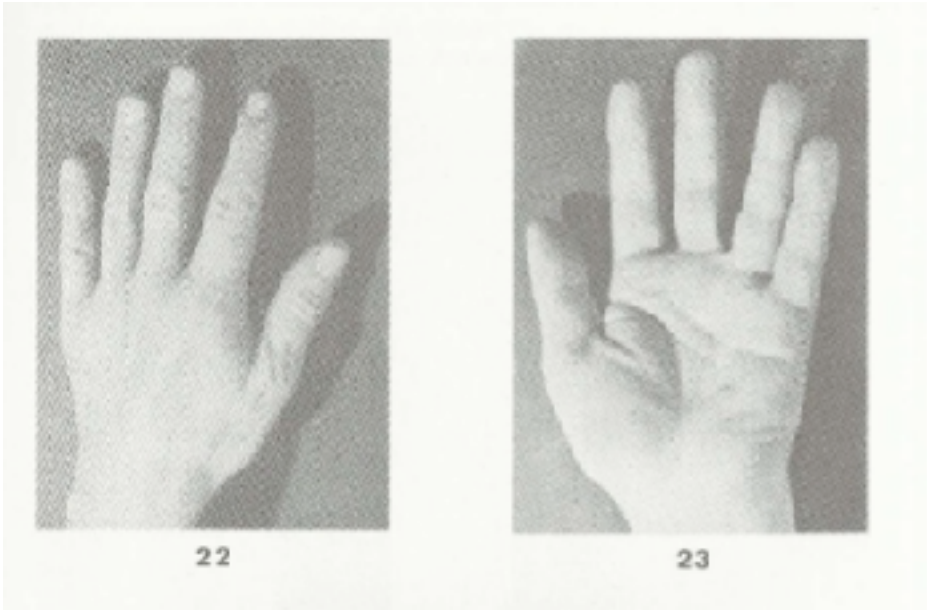
ここまでの説明から自然と分かるように、男性と女性では親指の発達の仕方に明らかな違いがあります。男性の体は女性の体に比べて、より頑丈で地球の重力に縛られる性質を持っています。それに対して女性の体は、そうした重苦しさや物質的な影響から、より軽やかに抜け出すことができます。

これに対応するように、女性の骨格は男性よりもずっと華奢にできています。それは親指にも同様に表れており、女性の親指の指先（末節骨）はより細く、爪も丸みを帯びていることが多いです。筋肉のつき方についても同じことが言えます。

※図20、21（女性）



※ 図22、23（男性）



ごく大まかに言えば、「親指の形を見れば、その人の意志のあり方が分かる」ということです。

ただし、誤解や誤った批判を避けるために、こうした観相学的な考察において何度でも強調しておかなければならないことがあります。それは、たとえば「意志が強い、弱い」といった判断は、あくまでその人が生まれ持った「傾向」を示しているに過ぎないということです。その素質を本人がどれだけ活かしたか、あるいは、見つかった弱点を本人がどれだけ努力して克服したか、ということまでは親指の形からは決して分かりません。

子供が生まれ持つ才能や不器用さは、多くの場合、最初の数年で早くも現れるため、適切な教育的なアプローチが必要です。しかし、その教育がどれほどうまくいったかという「結果」は、指の形にはほとんど表れません。

非常に短い親指（図24）は、もしかすると代謝系の弱さや、意志の力が抑えられていることを示している可能性があります。親指を人差し指の横にピタリと並べたとき、人差し指の最初の節（基節骨）の半分にも満たない場合、それは「非常に短い親指」と言えます。

※図24



24

もちろん、それだけで全てが決まるわけではありません。何よりも大切なのは、その指が与える全体的な印象です。芸術的な感性や実生活における観察眼を持っていれば、すぐにそれを見分けることができるでしょう。

長さがあり、同時に横幅もしっかりとある親指は、力強い「意志のシステム」を持っている可能性を示しています。

いずれにせよ、手の甲側では骨の形がよりくっきりと現れることを考慮すべきです。一般的に手の甲側は、より無骨で硬く、指先（末端）に向かうにつれて、最終的にはかなり硬い「爪」に変化します。

このように、手の甲側と手のひら側の間には本質的な違いがあります。手のひら側は柔らかさが際立っているだけでなく、筋肉がふっくらとしたクッション（肉層）を作って手の中心に向かって集まっているため、骨の形はほとんど見えません。親指においては、指そのものの形よりも、盛り上がった手のひらの肉（母指球）のほうが目立つことがほとんどです。手のひら側から見ると、たった一つの手にどれほど強大な力が秘められているかがよく分かります。

手の甲と手のひらの違いは、人間の心理的な「2つの身ぶり」にもはっきりと表れます。

例えば、誰かが理屈（知性）だけを頼りにして、しかし非常に熱を込めて「誰の目にも明らかなこと」を説明しようとするとき、その人はテーブルの上に手の甲を乗せ、こう付け加えるでしょう。「皆さん、これは誰が見ても当たり前のことですよ！」と。そして、それを証明するかのようにテーブルを手の甲（または指の背）で何度もトントンと叩きます。日本語でも「そんなの、手のひらを見るより明らかだ（英語圏では、それほど明白だという意味）」と言うことがあります。

しかし、もし聞き手から反論や不満が沸き起こり、話し手がだんだんと興奮してきたら、今度は相手を自分の「意志」で押さえつけようとします。そのとき、人は手の内側、つまり「手のひら」でテーブルをバンと叩き、おそらくこう叫ぶでしょう。「これ以上、そんな言い分は絶対に認められない！」と。

最初のケース（手の甲）では、より無骨で、硬化（頑固さ）や知性へと向かう「手の甲」がもたらす感覚を頼りにしています。一方で、2番目のケース（手のひら）では、血液が激しく巡り、筋肉によって強化された「手のひら」を使って、自分の強い意志をむき出しに表現しているのです。

親指と人差し指の対比は、次のような動きにとてもよく表れます。私たちは、目の前にある何かに注意を向けさせたいとき、ほとんどの場合「人差し指」を使います。この場合、指をさす行為は、いわば「目（視線）」と連動して行われます。

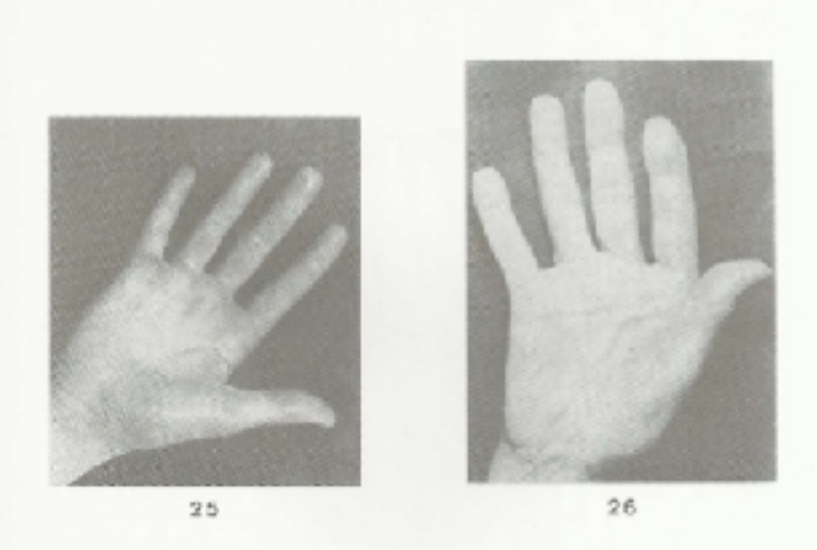
一方で、自分の後ろにあるものを指し示すときは、視線をそちらに向けずに、多くの場合「親指」を使います。例えば、劇場で自分の後ろに座っている人について、「この人がここでタバコを吸っているんです！」と不満を言うとき、後ろを振り向かずに親指を後ろへ突き出します。このように、親指は常に「意志の衝動」とより深く結びついています。目で直接見ることができないけれど、存在を感じ取れるものに注意を向けさせるには、より高いレベルの努力が必要となります。そのため、この場合は親指が使われるのです。

ヒッチハイクをしようとするとき、世界共通の合図として使われるのも「親指」です。旅人は、自分の明確な意志を示して、車を止めようとドライバーに働きかけるのです。

〔年齢による変化と身ぶり〕

高齢の人や年配の人の親指を見ると、若い頃よりも親指が内側にくぼむようなカーブ（凹型）を描いているのが時折見られます（図25、26）。

※図25、26



親指の最初の節と、その次にある手のひらの骨（中手骨）をつなぐ「付け根の関節」が、よりくっきりと目立ってきます。親指がこのような形になるのは、時に代謝系の衰えや、体が硬化し始めているサインです。これは、特に老年期の風湿（リュウマチ）による変化として顕著に現れることがあります。この症状は、代謝による「体を新しく組み立てるプロセス」が後退していることを表しています。多くの場合、これは体全体が硬化しやすい傾向にあることの兆候と言えます。こうした状況では、親指が他の指の仲間から、さらに遠くへ離れていくような印象を与えます。

しかし、このような老年の形は、特定の「動きの癖」の結果として理解することもできます。若いうちから、特定の場面で親指を他の指から大きく外側へ広げる癖を持っている人がいます（この時点では関節に変形は起きていません）。人がこのような動きをするのは、何かをしようとする意志の活動において、自分の他の「感情」から自分をできるだけ切り離そうとするときです。この場合、そこには「硬化させるもの、突っ張るような力」が働いています。また、歳を重ねた人によく見られるような、ある種の「頑固さ」もそこに現れています。

これまでに述べたことに加えて、簡単に以下を補足しておきます。

・拳を握るとき、親指を他の指の上に乗せる（外側に出す）場合：
激しい怒りの発作などのとき、この形になると、抑圧された意志が（体の下側の領域から燃え上がる本能的な生命力と結びついて）、思考や感情を支配してしまっていることがすぐに分かります。

・親指を他の指の下に包み込む（内側に入れる）場合：
例えば深く瞑想して考えているときなど、この形になると、逆に、意志の衝動がまず「思考」によって上から抑え込まれるべきであることを示しています。

・親指を大きく外側へ引き離す場合：
上で説明したこの3番目の動きは、代謝活動の領域における弱さの兆候でもあります。それは、意志の硬化や、ある種の身動きの取れなさを引き起こします。

老年の現象として、親指を外に広げる身ぶりは、観相学的にとても注目に値します。なぜなら、生まれたばかりの赤ちゃんが、お乳を飲んで消化するときに「手をしっかりと握りしめている（拳を作っている）」のとは、ちょうど真逆の姿勢を表しているからです。

〔II〕人差し指

人差し指は親指の「手強いライバル」のように見えます。なぜなら、人差し指は「観察の感覚」や「思考」の活動と、並外れて強く結びついているからです。

すでに「目との親戚関係」について触れましたが、さらに別の側面も付け加える必要があります。感覚器官としての「目」は、私たちの観察、イメージ（表象）、そして想像力豊かな思考に非常に大きな影響を与えています。視線はとりわけ「光と色」に関わっており、どちらも地球の重力を超えて高く舞い上がるものです。目の見えない人の人差し指は、触覚を通じて目の代わりを果たします。これは、指で突起した文字（点字）を読むときなど、非常に見事に行われます（実際には人差し指だけが使われるわけではありませんが）。

人差し指を観察すると、その活動において、常に好んで「触覚」を頼りにしていることがよく分かります。それは多様な動きに表れています。実際のところ、人差し指は常に「何かに触れること」を求めているのです。

・私たちが考えているとき、前述のように、人差し指は両方の眉毛の間にある「額」に触れます。

・何かについて熟考しているけれど、感情を静めたいときは、好んで「鼻の頭」に触れます（鼻は、中間の人間、つまり『感情の人間』と関係があります）。

・いたずらな子供たちが、誰かに対する嫌悪感を表現したいとき、はっきりとした身振りでそれを示します。鼻の頭を強く押すのですが、先ほどの静めるための少し下に押し下げる動きとは違い、人差し指で鼻の頭を上に向かってギュッと押しつぶすのです。

・そして、話すことなど、意志の表現を抑えたいときには、やはり人差し指が「口」を指さします（口は『意志の人間』のイメージに属します）。この事実は、一般的な章でフラ・アンジェリコの絵（図11）を例に挙げてすでに説明しました。

人差し指の指先（末節骨）における神経活動と感受性の強さは、他のどの指にもほとんど類を見ません（ある程度は、後で説明する中指にも共通しますが）。したがって、人差し指の形態（形）が、ある程度までその人の「知覚や思考の可能性」を映し出す鏡になることに気づくのは簡単なことです。

〔知性と爪の形〕

優れた思考力を持つ人は、一般的に、人差し指の先（末節骨）の半分の長さにあたる爪を持っています。そのため、爪は短すぎてはならず、縦方向には比較的平らで、横方向には少し丸みを帯びている（緩やかなアーチ型である）のが理想的です。

これに対して、爪がまるで動物の「爪（かぎ爪）」のように強く下向きに曲がっている場合は、通常、胸のあたりでエネルギーが滞っている（感情を溜め込んでいる）傾向を示しています。このような人は、本能的な衝動に強く影響されやすいといえます。明晰な思考に導かれるよりも、自分の本能に従って行動することを好みます。

このように爪が強く曲がる現象は、男性よりも女性によく見られます。女性はそもそもその性質上、抽象的な思考に屈することなく、自分の直感や衝動に従って動きやすいからです。自分の本能を愛する気持ちが外側に強く現れると、爪を指先よりもはるか先まで好んで伸ばすようになります。すると、動物に見られるような「かぎ爪」の形がさらに強調されます（これは当然すべての指に言えることですが、特に2番目の指である人差し指で目立ちます）。

生まれつき、人差し指の爪が短すぎるというケースもあります。この場合、その人がまさに「形成する力」や「思考の力」の不足に悩まされている可能性が推測されます。このような人々は太りやすい傾向（肥満傾向）があり、しばしば筋肉がたるんでおり、そのたるんだ筋肉を内側から硬くしようとする傾向を持っています。顔はどちらかというと丸顔で、顔立ちの印象はあまりはっきりしていません。性格的には、自分の考えにおいて他人に譲歩しやすく、自己主張が少ない（印象が薄い）人たちです（図27）。

※図27



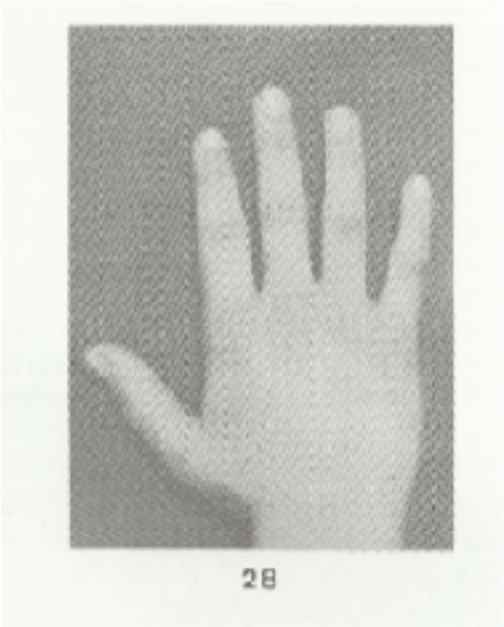
これとは逆に、爪が少し長すぎてあまり丸みがない（平らすぎる）場合は、体の中に溜まる「硬化させる成分」を、できるだけ体の末端へと押し出そうとする無意識の意図が隠されています。このような指の形をしている人は、思考が頑固になりやすく、その硬化する傾向は代謝の領域にまで及びます。

この傾向が病的に強くなると、例えばリュウマチのような病気として現れます。指の関節に変形を伴う腫れができるのですが、こうした変化は、年配の人において「まず人差し指から始まる」のを何度も観察することができます。

〔読書や合図に見る身ぶり〕

先ほど、「人差し指は動くときに常に外のモノと触れ合おうとするため、触覚と深い関係がある」と説明しました。これに加えて、自分自身で本を読むときや、誰かに読み聞かせるときに、人差し指で文章の行をずっと追いかける癖を持つ人がいることも思い出してください。目で追うのを助けるために、その人は指を使ってテキストにしがみつこうとしているのです。そして、この動作に使われるのは常に「人差し指（第2指）」だけです。

※図28



もう一つ、人差し指がどれほど「接触」を求めているかがよく分かる身ぶりを紹介します。

誰かが外のドアの前にいて、その人を中へ呼び寄せたり、こちらに来てほしいとき、私たちは人差し指を曲げて「手招き」の動きをします。相手を自分の手が届く範囲に引き寄せようとするのです。実際に相手に直接触れるわけではなくても、その人はこちらに近づいてきます。そして、この合図もまた、必ず人差し指だけで行われます。

〔人差し指の骨のバランス〕

人差し指について象徴的なのは、指を構成する3つの節（末節骨・中節骨・基節骨）が、一般的にとても調和の取れたバランス（だいたい同じ長さ）をしている点です。ですから、この長さに明らかなばらつきがある場合は、その指の持ち主に何らかの不調和があることを間違いなく示しています。

爪だけでなく、指先（末節骨）全体が少し短くなっているケースもあります。これは、さまざまな能力の弱さを表している可能性があります。

・生まれつきの全体的な目の弱さ（視力低下や近視など）
・触覚の未発達からくる、ある種の手先の不器用さ
・思考やイメージを膨らませる上での、精神的な難しさ（心の壁）

〔3つの節を持つ指の意味と「三分節化構造」の現れ〕

人差し指は「3つの節（関節）を持つ指」の最初として登場しました。ここで私たちは、なぜ人間に4本の「3つの節からなる指」があるのかという、観相学的な意味に目を向けなければなりません。

注意深く観察してみると、手のこれらの部分には、人間の身体と心にとって非常に重要な「三分節化された構造」の反映が再び現れていることが分かります。

親指がこの「3つの節のルール」から外れているのはそのためです。前に詳しく説明したように、親指は新陳代謝の活動とあまりにも強く結びついているため、中間のつなぎ目の節（中節骨）を形づくるためのエネルギー（形成力）が残されていませんでした。

親指の中間のエネルギーは、一部は上方の指先（末節骨）へと移動し、そこにある神経活動にさらなる「熱（生命力）」をもたらしました。その一方で、下方の付け根の節（基節骨）には、リズムを刻む活動の可動性が深く沈み込んでいます。しかし、親指に「中間の要素」が残されているのは、結局のところ、親指が手の一部として、最終的には「リズム（感情）人間」ともつながっているという事実においてのみです。とはいえ、そのつながりだけでは、他の指のように「中節骨」を形成するほど強くはなかったのです。

〔調和のとれた人差し指〕

それに対して、感覚の拠点（ポール）が非常に強く表現されている人差し指では、多くの場合、調和のとれた「3つの節の構造」が維持されています。

3つの部分がだいたい同じ長さになっている図29を見てみてください。これは、身体と心の3つの要素がバランスよく発達していることを示しています。人差し指の最初の節（付け根の節）ががっしりとした形をしていることに注目してください。ここから、この人の「思考」の中には力強い「意志」の要素もしっかりと投影されている、つまり「自分で決めたことを実行に移す能力がある」ということが分かります。

※（図29）



また、指先が綺麗に丸みを帯びているのは、その人の「優れた観察力」と「優れた思考力」を際立たせています。真ん中の節も十分に発達しており、心の他の2つの活動（思考と意志）に対して、その人の「気質（感情）」が調和して働いていることを示しています。

〔不調和な人差し指〕

これとは対照的に、指先（末節骨）が非常に短く、爪も小さい人差し指（図28）の形はまったく異なります。3つの節の長さがバラバラで、形もいびつです。

このように爪のある指先が小さく縮んでいるのは、思考することが苦手な傾向を表しており、また、形が崩れた付け根の節には、意志の粗雑さが現れています。感情も、スムーズに介入することが難しくなっています。

〔指に宿る「人間全体」の縮図〕

これら2つの例は、この人差し指1本を見るだけでも、人間の本質である「思考」「感情）」「意志」がどのように現れているかを教えてくれます。それが可能なのは、まさにこの指のそれぞれの節が、身体や心の3つのプロセスのシンボルを特別な形で宿しているからです。

もちろん、他の指においては、これら3つの身体システムとの結びつきの強弱によって、音楽のテーマが変奏されるように、また違った現れ方をします。最初は複雑で混乱するように思えるかもしれませんが、その多様性を理解できるようになれば、すぐに観察することが楽しくなるはずです。私たちは型にはまった見方をする必要はありません。ただ、本質を導く「精神的な思考」を持っていればよいのです。

私たちが「思考の指」とも呼ぶ人差し指は、そのすべての活動において、神経による触覚の知覚や思考活動が最前線にあることを明確に教えてくれます。しかし、これらのプロセスは、指先だけでなく、真ん中の節や付け根の節が付け加えるもの（感情や意志）と常に伴い合っています。

すべての神経は単独では生きられず、常に血液から栄養を補給されなければならないことを思い出してください。結局のところ、これは観相学的な見方ではありますが、ルドルフ・シュタイナーが著書『自由の哲学』で教えたこと、すなわち「いかなる思考も、ある程度の意志が浸透しており、常に感情を伴っている」ということと完全に一致しているのです。

〔指の三元的な呼び名〕

ここから、4本の指（人差し指、中指、薬指、小指）についての明確な「3つの捉え方」にたどり着きます。

1）上部（指先）： 爪に覆われた「小さな頭」＝ 末節骨
2）中間（真ん中）： つなぎ目の節 ＝ 中節骨
3）下部（付け根）： 最もボリュームのある部分 ＝ 基節骨

手のひら側からこの付け根の節を見ると、指の「小さな、ふっくらしたお腹」と呼ぶこともできるでしょう。ここには、指を曲げるための筋肉（屈筋）が最もくっきりと突き出ています（解剖学でも筋肉の膨らんだ部分を『筋腹』と呼びます）。特にスポーツをしているアスリートの手ではこれがはっきりと現れますし、ピアニストの手（図30）でもよく観察することができます。

※（図30）



要約すると、人差し指について言えることは、「人間の心の調和のとれた発達は、人差し指にもその痕跡を美しく残す」ということです。それは、指の3つの部分がバランスよく整った形として現れます。長さがどこか一箇所（上、真ん中、または下）に極端に偏っている場合は、すべて先に述べたそれぞれの意味（弱さや滞りなど）に対応していると考えてよいでしょう。

〔III〕中指

中指は、すべての指の中で一番長さがあります。そのため、指の中で最も重要な存在であるようにも見えます。真ん中に位置していることから、他の指たちをコントロールしているようにも思えるでしょう。

人間の体の先端（上半身）は、肩から始まり、上腕、前腕を経て、外側に向かってごく自然な形でこの「中指の先」へと行き着きます。つまり中指には、中間に位置する人間（リズム人間）のエネルギーが、外側に向かって最も広い範囲へと放射されているのです。

〔中指の骨と「中間の性質」〕

中指に対応する手のひらの骨（中手骨）は、ちょうど手の真ん中を通っています。そして、前に説明した手のひらの中心（手相の真ん中のくぼみ）も、だいたいこの3番目の中手骨の真ん中あたりにあります。

腕と手が「リズムの人間（呼吸・循環系）」に属していることを思い出すと、中指はまさに「真ん中の中の、最も真ん中にあるもの」と言えます。指たちの中で、中指は全体を支える柱であり、すべてがその周りを回る「軸」のような役割を果たしているのです。

次の結論からも、中指がどれほど「中間」と深く結びついているかが分かります。4本の指の三分節化された構造について説明したとき、次のような関係があることを確認しました。

上の節（指先）： 神経・感覚系と関係が深い

下の節（付け根）： 新調代謝系と深い親戚関係にある

真ん中の節（中間）： 常に「呼吸と循環の人間（リズム系）」が介入する

中指を観察すると、単に指全体が一番長いだけでなく、その長さが「中節骨」が一番長いことに由来していることが分かります。この真ん中の節は、他のどの指のどの部分よりも長いのです。これは非常に注目すべき点であり、はっきりとさせておく必要があります。

これにより、中指のまさにこの真ん中の部分が最もよく形づくられており、ここでも再び「中間の領域」の代表として存在していることが明白になります。自然は、私たちの体の中でこれほど精密に、そして賢く働いているのです。その形態に深く分け入ろうとするとき、この事実が明らかになります。

〔観相学的な「指の長さ」の定義〕

指の長さについて、観相学的な補足を加えておく必要があるでしょう。ここで言う指の長さとは、皮膜（指と指の間の水かきのような皮膚の境界）に邪魔されず、「自由に動かすことができる範囲」だけを指します。

関節のコブ（※原注：中手骨と最初の節との結合部にある骨の突起）は、もはや指には含まれず、後で説明する「手そのもの（手首や手のひらの領域）」の一部として扱われます。解剖学的な意味でも、これらは手のひらの骨（中手骨）に属するものとみなされます。

〔中指の感覚と健康さ〕

指のコミュニティの中で特異な中心位置にある中指には、他のすべての指の性質が、とても均等な割合で集まっています。

その感受性は人差し指ほどではないにしても、非常に優れています。爪そのものは、他の指に比べて湾曲が少ないことがあります。これは神経・感覚系とのより強い結びつきを表していますが、指先（末節骨）の形自体は人差し指ほど繊細には作られていません。このことから、触覚に関しては、3番目の指（中指）は2番目の指（人差し指）に対して、ある種の従属関係にあることが分かります。とはいえ、この2本の指は合わさることで、人間にとって並外れた触覚器官（おそらく人間が持つ中で最高の触覚）を形づくっています。

真ん中の節（中節骨）が特に長いことについてはすでに強調しましたが、この長さの比率は、外側の隣人である「薬指」の真ん中の節とよく似ています。まさにこの部分が長いという事実こそが、中指と「リズム・システム（呼吸・循環）」との深い結びつきを示しているのです。

また、中指は「すべての指の中で最も健康な指」であるようにも見えます。

例えば人差し指は、寒さの影響を受けると血管の痙攣を起こしやすく、一時的に皮膚が蝋のように真っ白になってしまうことがありますが、中指はそうした循環器系のトラブルをほとんど起こしません。寒い時期に血行不良のサインとして現れる「しもやけ」も、中指より人差し指（第2指）をはるかに多く襲います。指の関節に現れる小さなリュウマチの結節（しこり）も同様で、これらは主に人差し指の「指先と真ん中の節の間」に好んで現れます。

中指の下3分の一（付け根の節）も、他の指に比べて非常にしっかりと発達しています。手のひら側から最初の節を見ると、指を曲げる筋肉（屈筋）の強い盛り上がりが実によく見えます。これは、この指の持つ力強さを示すと同時に、体の「栄養補給や新陳代謝のプロセス」との密接な関係を告げています。

中指のこれらすべての性質をじっくり考えてみると、それらは一様に、中指が「手の中で最も調和のとれた部分」に属しているという証明になります。中指には、極端な偏りや、一方だけに偏った発達がありません。中指は、この非常に重要な指のコミュニティにおける、バランスの取れた「理想的な市民」なのです。

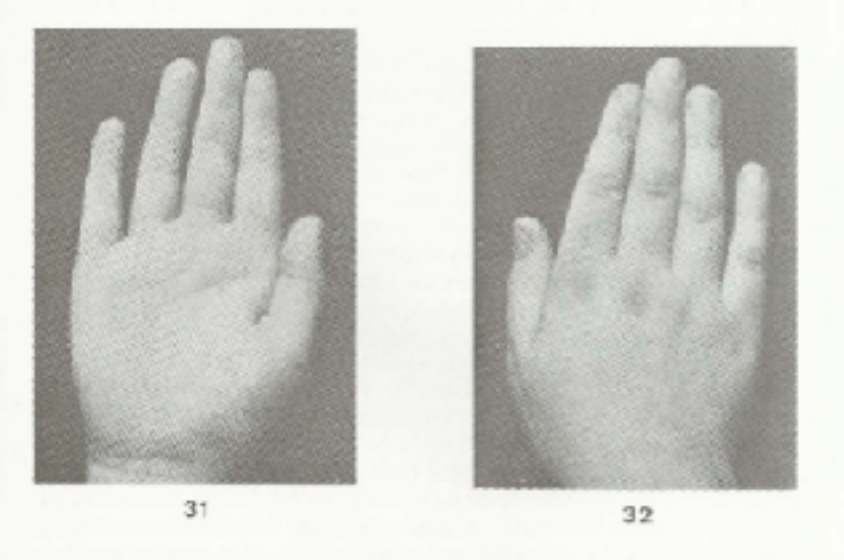
〔教育者へのメッセージと具体的な観察例〕

教育者は、体に弱さの傾向を持つ子供たちの「形のゆがみ」に気づくために、まずこの中指の特徴を意識的に理解しておく必要があります。そうすれば、まだ間に合う適切な時期に、教育的、医療的、そして社会的なアプローチによって是正を加えることができるでしょう。教育者は、どのようなアプローチが最も成果を上げやすいかということまで予感できるようになります。

このことを中指の考察において考えるのは、中指がその自然な健康さゆえに、「他の指がもはや担いきれなくなった役割を、代わりに引き受ける能力が最も高い指」だからです。そのため、例えば子供の手に、この3番目の指（中指）にまではっきりと現れるような形態の変化が見られる場合は、特に深刻に受け止める必要があります。

例として、2つの図（図31、32）に描かれている、ある男の子の手を見てみましょう。

※（図31、32）



手全体から、この子が生まれつき「締まりのない、ふにゃふにゃとした性質（組織の弛緩）」を持って育っていることがはっきりと分かります。また、体脂肪を溜め込みやすい（太りやすい）傾向があることも現れています。その皮膚は異常なほど薄く、多くの場合、熱を持っていて少し湿っています。

体を硬く引き締めようとする「形成の力」に対する弱さは、ここに描かれている「深く噛みちぎられた爪」にも現れています。この男の子は、この不快な癖（爪噛み）をやめようと素直に努力しています。十分な意識を持ってやめられる年齢に達しているのですが、「意志が弱すぎる」ためにそれが阻まれているのです。この意志の弱さは、非常に短く現れている親指にとてもくっきりと示されています。

この男の子は体重も非常に重く、まるである種の儀式のような情熱を傾けて、日々の食事を味わっています。

最後に、この男の子の「中指」に絞って、もう一度深く観察してみましょう。

図から分かるように、指先（末節骨）は確かにとても短く、形が不格好で太すぎます。形づくろうとする力（形成力）が弱々しくしか介入していません。この症状は、人差し指よりも、むしろこの中指においてより強く現れています。ここから、考える力が弱く、十分に育っていないことが分かります。

また、真ん中の節（中節骨）もあまり形が整っておらず、手の甲側から見ると、まるで腫れぼったく浮腫（むく）んでいるように見えます。この中指の真ん中の節の状態から、彼の感情の生活が「怠惰で、表面的なものである」と結論づけても、決して間違いではないでしょう。

しかしながら、彼の最初の節（付け根の節）からは、筋肉自体はよく発達していることが読み取れます。ただ、その節があまりにも短く、ぎゅっと押し潰されたようになっています。ここから、非常に強い新陳代謝の力が存在しているものの、それが彼自身の内側に閉じこもってしまっており、魂から湧き出る「本当の意志」を外へ出せずにいることが分かります。

このように発達のバランスが崩れてしまった難しいケースでは、この男の子を「筋道の通った、それでいて豊かな想像力に導かれた思考」ができるように育てるまでに何年もかかります。例えば、鮮やかな色を使って絵を描くことは、眠り込んでしまっている脳の力を呼び覚ますのに役立つかもしれません。また、音楽の演奏を体験したり、楽器の弾き方を習ったりすることは、彼の感情の領域をしっかりと組織化し、より深めるために役立つはずです。

そして、この男の子にとって何よりも重要なのは、「意志の生活」を規則正しく整えてあげることです。まずは何よりも、一日のスケジュールをとても正確に管理し、彼が生まれ持った「怠惰さ」に身を任せてしまう隙を一切与えないように、全力を尽くすべきです。

このように、健康な人よりも、むしろ少し病的な傾向を持つケースにおいて、体に現れる顕著な変化をよりはっきりと認識することができます。そして、手の観察は、その原因がどこにあるのかを私たちに明確に教えてくれるのです。

〔IV〕薬指

手の領域において、この「薬指（第4指）」には、非常に多様な性質を持つ力が働いています。薬指が「人差し指」とほぼ左右対称の配置になっていることに、多くの人は驚くかもしれません。この2本の指は、ほとんどの場合（いつもではありませんが）同じ位置にあり、長さもだいたい同じです。5本の指の中で、この2本ほどお互いによく似ている組み合わせはありません。

しかし、実はそれは一見しただけの表面的な観察に過ぎません。なぜなら、薬指は、人差し指や中指に比べて「本物の感覚器官の指（知性の指）」としての性質がはるかに少ないからです。

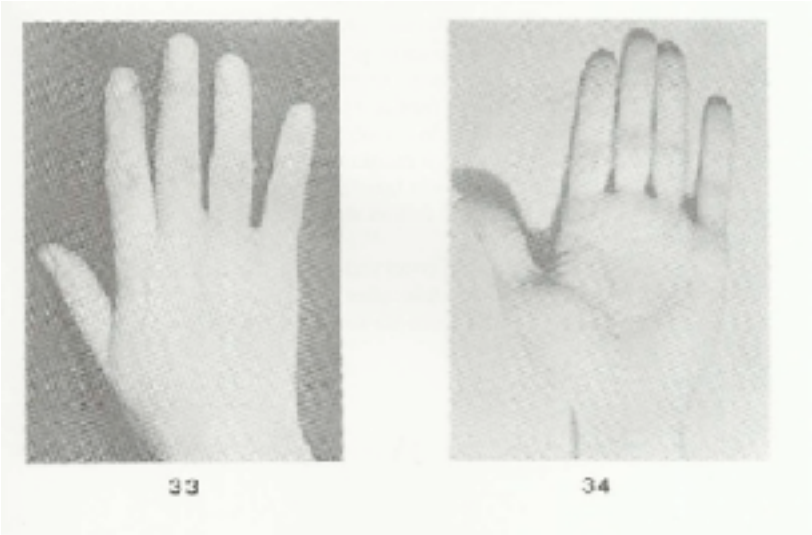
4番目の指（薬指）の爪は、通常、2番目の指（人差し指）よりも丸みを帯びています。このことからも、薬指が「無意識の感情」にどれほど強く影響されているかが再び鏡のように映し出されています。それもそのはずです。薬指のケースにおいては、その無意識の感情こそが、彼が本来持っている本質なのですから、それ以外になりようがありません！

〔人差し指と薬指の「カーブ」の対比〕

観相学的な観察において、他の指との比較はとても役に立ちます。人差し指と薬指を上（手の甲側）から注意深く観察してみると、人差し指の真ん中の節（中節骨）は、多くの場合、中指の側に向かってほんの少

しだけ緩やかにカーブしていることが分かります。このカーブは、人差し指が何よりもまず「外側へ、外部へ、自分の体から遠く離れた場所へ」と常に何かを指し示していることを暗示しています（図33、34）。

※（図33、34）



これとは対照的に、薬指の真ん中の節にも、中指の側に向かう同じようなカーブが見つかりますが、その方向はちょうど真逆です。この薬指のカーブは、人間の「内側」に向かって作られています。つまり、人差し指のように体から遠ざかるのではなく、まさに「自分の内面」へと向かっているのです。

〔感情のシンボルとしての薬指〕

手の三分節化された構造の観点から考えると、4番目の指（薬指）と5番目の指（小指）は「リズム・システム」、すなわち「感情の人間」と密接な関係を持っていることに、一般的な章ですでに注意を促しました。こうして考えると、薬指が（大抵は小指と一緒に）このように少し内側へと向かう傾きを見せることも、すんなりと理解できます。感情の生活は、感覚の活動（知性）よりも、はるかに強く「内面」で体験されるものだからです。

通常、薬指は人差し指よりもほんの少しだけ（多くはわずか数ミリメートルほど）長いです。これは、普段はあまり意識されることのない事実です（もし人に尋ねたら、大半の人は人差し指のほうが長いと答えるでしょう）。これを見分けるのは簡単で、人差し指の爪の先端は、多くの場合、薬指の爪の先端よりも低い位置にありますが、中指の爪の付け根（生え際）よりは高い位置にあります。これら個人の多様なバリエーションについては、後ほど改めて扱います。

今日に至るまで、結婚指輪が薬指にはめられるのは、決して偶然ではありません。人間の最も深く、愛に満ちた内面の感情と深く結びついている指だからこそ、愛の象徴である指輪を宿すのです。この4番目の指の意味を理解する上で、このことを改めて思い出しておくことは重要です。

また、薬指には少し丸みを帯びた形で内側へ曲がろうとする傾向もあります。多くの場合、小指と連動してこの動きを行うのですが、この身ぶりは、とりわけ「感情の本質」にしっかりと寄り添うような、内省的な印象を周囲に与えます。

〔瞑想する姿勢と身ぶりの分析〕

これらの指が特別な役割を果たす「特定の身ぶり」をより正確に描写することは、それぞれの指の見た目や、指たちがお互いに連動してどのように働いているかを、より明快に解き明かすことに大きく貢献するでしょう。

例えば、ある人が椅子に座りながら、何かについて深く熟考しているとします。その人は当然、頭の重さを少し軽くしようとするでしょう。なぜなら、思考を巡らせるには「軽やかさ」が必要だからです！そのため、人は肘を突きます。手首は外側や後ろ側に向かって力強く曲げられ、顎が手のひらと親指の間にすっぽりと収まります。こうすることで、頭を心地よく預けることができます（図35）。

※（図35：アルフレッド・ノーベ　　ル）



この図35において、親指は真横からの写真であるために見えなくなっていますが、この姿勢において頭の重さを支えるのをしっかりと手伝っています（親指という指は、常にこうした「力強さの誇示」に関わっているからです！）。

そして、「感覚の指（人差し指）」と「思考の指（中指）」は、まっすぐ上を向いて、頬に軽く添えられています。この人差し指と中指の様子からは、彼らが上から下へと「正しい思考」を手繰り寄せようとしているかのような印象を受けます。彼らは、良いアイデアがやってくるのを静かに待っているのです。

その一方で、薬指とその小さな弟（小指）の2本は、内側へと丸められています。これは、この瞑想している人の感情が、魂の中で静かに休息しており、いま行われている知的な思考の邪魔をしたくないと考えているサインです。この2本の指は、彼らにとって非常に特徴的な位置で、顎をぐっと押し込んでいます。

この姿勢には、ある明確な意志が表現されています。「顎」という部分は「意志の人間」に属しており、「感情の指（薬指と小指）」がその部分をグッと押さえているのです。この身ぶりは、次のような内面の声を告げています。

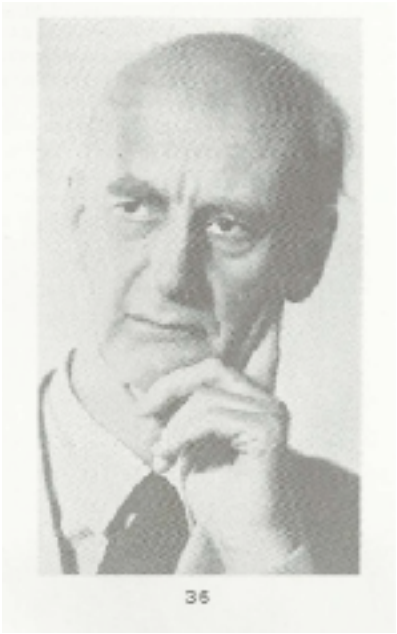
「私の元に届いた（上から降りてきた）思考は、私は快く受け入れよう。しかし、私の感情が私に指し示してくれること（内なる情熱）を、私はしっかりと行動（意志）に変えていくのだ」と。

これこそが、この手の姿勢に対する最も優れた解釈です。この男性にとって、この姿勢は決してその場限りの偶然のポーズではなく、彼の本質そのものに対応しています。この人物の正体は、技術的な発明家であり、ノーベル賞の創設者であるアルフレッド・ノーベルです。彼がかつて、自分の実験室のノートの裏に鉛筆で書き残した言葉は、まさにこの写真に写る手の表情から読み取ることができるかもしれません。

「ここには、感情の哲学（心の哲学）と、思考の哲学（理屈の哲学）の双方が、同じように存在している」と。

このような姿勢のほんの小さなバリエーションの中にも、どれほど多くの内面が頻繁に露呈してしまうことでしょうか！次の図（図36）を見てみましょう。こちらも同じように、瞑想しているときの姿勢を示しています。

※（図36）



人差し指は上を向いていますが、耳の後ろあたりに置かれています。この人が上から手繰り寄せようとしている「思考」は、先ほどの発明家（ノーベル）が求めていたものとは、明らかに全く性質が異なるものです。これらのアイデアは、はるか遠く（精神的な高み）からやってくるものだと考えても、決して空想が過ぎるということにはならないでしょう。

このケースでも親指が頭を支えていますが、他の3本の指は内側に曲げられ、完全に「魂（内面）の世界」へと引きこもっています。薬指と小指は、深く感じる人間（感情の人間）にふさわしく、内側へと丸められています。そして、天秤の針のように物事を決定づける役割を持つ「中指」は、人差し指（知性）との繋がりを断ち切り、他の指の兄弟たち（感情のグループ）のコミュニティへと仲間入りしています。

この身ぶりにおいて、歳を重ねた巨匠（指揮者）フルトヴェングラーの姿は、「思考」がかつてのように力強く最前線にあるわけではない、ということを物語っています（人差し指は確かに上を向いていますが、より後ろに控えめに保たれています）。彼にとって今や何よりも重要になったのは、「心の温かい雰囲気」であり、それが全体を支配しています（人差し指さえも魂の領域を指し示しています）。しかし、若さゆえの純粋なエネルギーは、すでに消え去ってしまったかのようです。

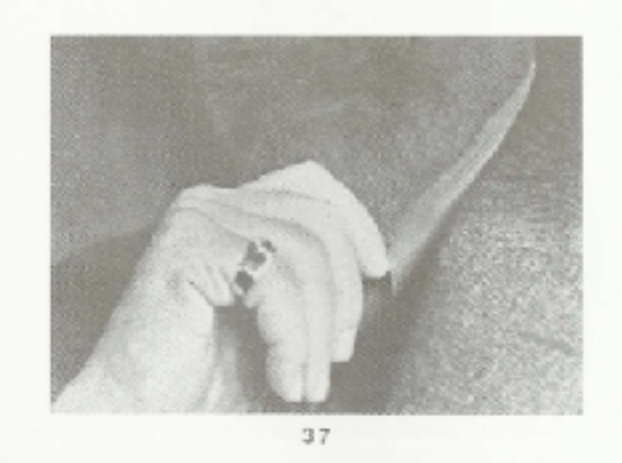
頭は少し横に傾いており、親指は疲れに打ち勝つための「支柱」にならざるを得なくなっています。ですが、この「感じる世界」は、確実に「意志」の王国へと介入しています。

感情として魂に宿っているものは、これからさらに行動の分野へと移行していくでしょう。だからこそ、3本の指が顎（意志）の領域に置かれているのです。この芸術家は、まだ何かを成し遂げるでしょう。彼は、自分の内面に生きている通りの音楽を、これから現実の世界に響かせるのです。

指の非常に表情豊かなポーズが写ったこの肖像画は、私たちにそのような物語を語りかけてくれています。

この流れの中でもう一つ、身ぶりを挙げることができます。それは、4本の指すべてが丸められて顎に添えられ、そのまま保持されているポーズです。

※（図37）

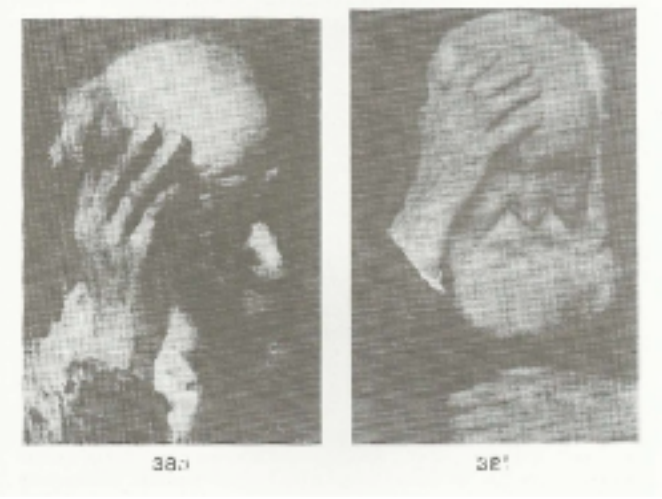

37

写真（図37）では親指は見えませんが、明らかに後ろから下顎を軽く圧迫しているものの、頭を物理的に支える役目はほとんど果たしていません。ここでは「魂（感情）の要素」が強く揺さぶられています。それは、中指だけでなく、人差し指までもが（少し控えめではありますが）「感情の指」と同じ姿勢に付き合っていることからも読み取れます。

この人物は、内なる感情を完全にざわつかせながら相手を見つめています。しかし、彼は単にそうして観察しているだけで終わらせるつもりはありません。次の瞬間には、強く働いている「助けたいという意志」から、親身になって実用的な行動へと移るでしょう。これは、診察を受け、次の瞬間には親切に隣人を助けようとしている「医師」の手のポーズなのです（図37）。

最後に、指を横に逃がしながら、頭の重さを完全に手に預けてしまっているポーズもあります。これは決して印象的な絵（ポーズ）にはなりません。その人は怠惰になっているか、あるいはひどく疲れているように見えます。内面の活動が停止しているため、すぐに眠りに落ちてしまうことでしょう（図38）。

※（図38a、38b）レンブラントとトーマの対比



2つの図（図38aと38b）を比較すると、手の様々な身ぶりのグラデーション（変化）がいかに繊細であるかが分かります。

一方の絵では、レンブラントが「物思いに沈む老人」を描いています。右側の4本の指が、頭をほんの軽く支えているのが分かります。4本の指のうち、主に指先（末節骨）と、せいぜい真ん中の節の半分までしか頭に触れていません。この老人の瞑想は、あらゆる地上の時間を超越しているように見え、おそらく内なる視線の前に浮かび上がってきた「過去の回想（思い出）」と対話しているのでしょう。

もう一方の図は、歳を重ねた画家トーマの自画像です。彼もまた右手で頭を支えています。私たちは彼の5本の指すべてを目にしますが、指たちは何をしているでしょうか？彼らは、決して思考から解放されているわけではなく、むしろ「思考の重荷に圧倒されている」かのような頭の重さを、物理的にしっかりと支えているのです。

このトーマの指と手には、レンブラントの絵から明確に感じ取れるような「魂の情緒（きめ細やかな感情）」は、もうほとんど刻まれていません。ここには、肉体の部分（肢体）が持つ純粋な物質としての性質が剥き出しになって登場しています。

この手には、ただ「重さを支える能力」としての力だけが残されています。右手はどうにかそれを行うことができますが、少しだけ見えている左手は、ただ台座の上に重々しく横たわっているだけです。

この2人は、いかに異なる形でそれぞれの老年期を過ごしていることでしょうか！それを芸術的に表現することを可能にしているのは、主に「手の位置」なのです。レンブラントの手にはまだ完全に魂が宿っていますが、トーマの手は地球の重力（物質的な力）に屈してしまっています。どちらも真実を美しく体現している姿として、私たちは尊ぶことができます。

〔指揮者の手と「音楽の指」としての薬指〕

深く精神的な感情が扱われるとき、薬指は常にそこに参加しているように見えます。それを説明するために、腕や手の衝動によってオーケストラからすべてを引き出さなければならない「音楽の指揮者（マエストロ）」を再び思い出してみましょう。

指揮者が指揮棒（バトン）を使うとき（これなしで指揮をする人は比較的少ないですが）、この棒は右手にとって「人差し指の延長」、そしてある程度までは「中指の延長」としての役割を果たします。その間、親指は主に指揮棒の重さをコントロール（保持）しなければなりません。そして中指は、部分的にすでに薬指や小指の側へと委ねられています。これら（薬指と小指）の2本の指は、内面的な感情の身ぶりを示します（図39）。

※（図39）

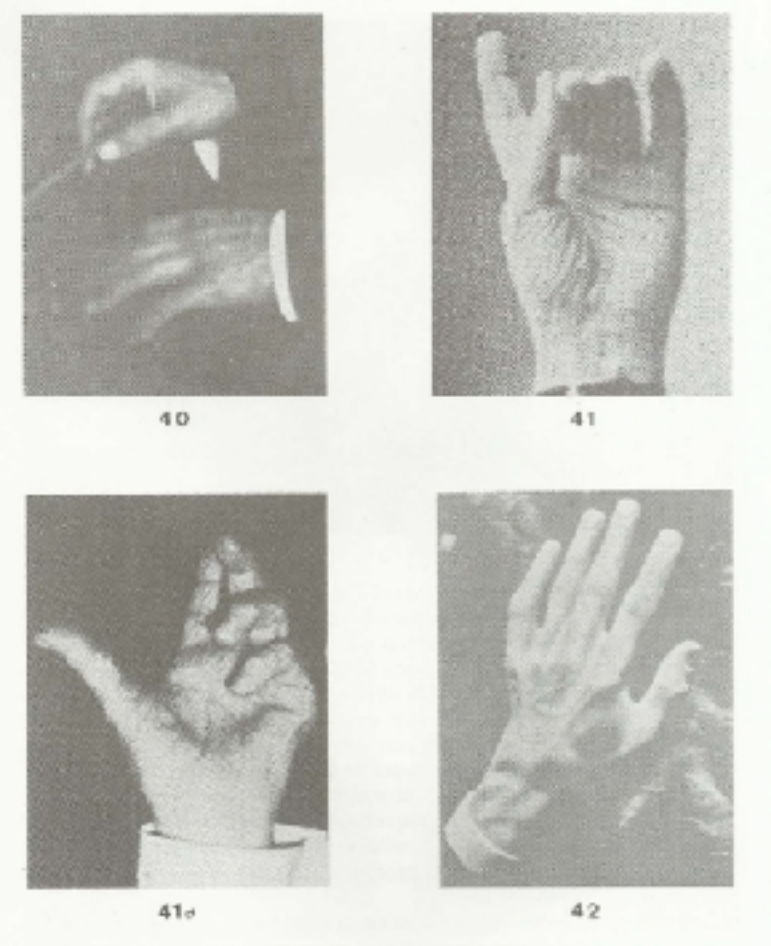


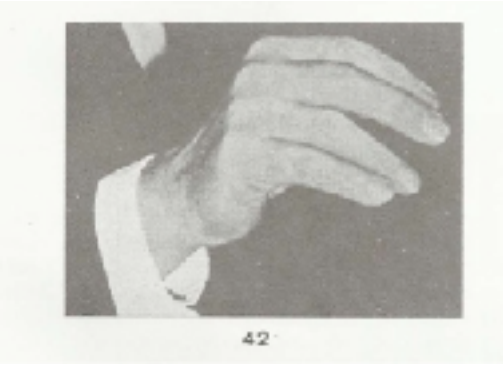
マエストロの右手は、正しいタイミングで音の入りを指示するために人差し指が強く参加することから、左手よりも「知的（思考的）」な役割を担っていると言えます。ここでは右手の「思考の指（人差し指）」が、オーケストラ全体に対して力強く「監視・先導する指」の役割を果たしており、指揮棒によってその意味合いがさらに強調されています。

しかし、より大きなスケールで見たとき、指揮者の「左手の薬指」、そしてそれに加わる「小指」が、音楽の魂の奥底から湧き出るような、非常に繊細な魂のニュアンス（例えば、特定のルバートに込められた表情など）を演奏家たちから引き出そうとしている様子を、私たちは認識することができます。

フルトヴェングラーの手（図40）にも、これら2本の指がまさにその通りの動きを行っているのを見ることができるかもしれませんが、今ある写真からそれを認識するのは少し難しいかもしれません。

※（図40〜42）





私たちの視点から見て、オーケストラを指揮している最中に撮影された、著名な指揮者レオポルド・ストコフスキーの左手（図41）は非常に注目に値します。人差し指がどこかのパートの入りに没頭している間、常に意志とより強く結びついている親指は、中指（普通なら簡単に人差し指の動きに付いていってしまいそうな指）をしっかりと引き留めています。そして親指は中指を、4番目と5番目の指（薬指と小指）が持つ「感情の要素」の方へと方向づけているのです。これら薬指と小指は、美しいカーブを描きながら、魂の内面で体験されるべきものを表現しています。

また、指揮者カール・シューリヒトの手（図41a）のポーズにも、深く感情が込められた姿勢が実に見事にお手本のように現れています。

〔偉大な演奏家たちの手〕

小指としばしば連動しながら、人間の感情の生活をこれほど強烈に宿している薬指は、いわば「すべての指の中で最も音楽的な指」です。

ある著名なピアニストが、なぜそんなことを聞かれるのか全く見当もつかない状態で、「ピアニストとして、自分の指の適性を特に評価することはできますか？」と尋ねられたことがありました。少し考えた後、彼は偏見のない態度でこう答えました。

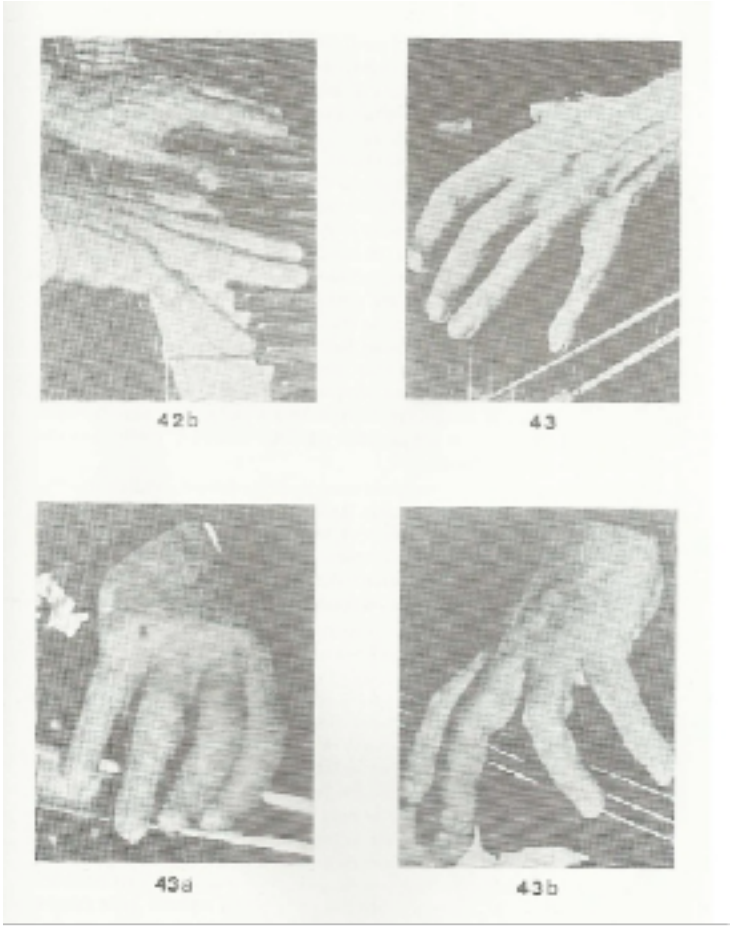
「魂の非常に深いところから湧き出るもの、完全に感情から来るものを表現しなければならないとき、4番目の指（薬指）が最もそれを表現する能力を持っています。そして、ある程度までは小指もそうです」

例として、彼は自分にとって非常に馴染み深い、ベートーヴェンのソナタ『ワルトシュタイン』の緩歩動楽章（遅い楽章）の一節をすぐに挙げました。また、シューマンのアラベスクにある特定の小節については、この曲が本来持っているロマンチックな親密さ（内面性）を表現するために、薬指以外では絶対に弾かない、とも語りました。

数十年にわたり実践を続けているプロの音楽家（ピアニスト）によるこのような発言は、いま説明した薬指が感情の領域と深く親戚関係にあるということの、喜ばしい証明（裏付け）になります。

この観点から見て、鑑賞するのに非常に美しいのは、ショパンの手の石膏模型（図42）です。まさに4番目の指（薬指）が最も高貴な形をしており、その一方で、他の指にはいくつかの病気の兆候（例えば、人差し指、中指、小指の真ん中の関節に見られる肥厚・腫れ）が突き出ています。様々な記述によると、ショパン自身の作曲した作品を、彼と同じほど繊細な表現の美しさで弾きこなせる者は、実際には誰もいなかったとされています。

※（図42～43b）



また、写真（図43）で見ることができるように、偉大なバイオリニスト、ヤッシャ・ハイフェッツも、左手の薬指が驚くほど見事に構成されています。この指は非常にバランスの取れた形（比率）をしており、何よりも私たちの感覚を裏付けてくれる特徴として、真ん中の節（中節骨）がくっきりと長く発達していることが確認できます。

パブロ・カザルスの、特に特徴的な形をした薬指（図43a：右手、図43b：左手）も、この上なく注目に値します。

音楽家の手の系譜としては、さらにヴィルヘルム・バックハウス（図42a）とアルフレッド・コルトー（図42b）の手も挙げておくべきでしょう。両者の手においても、右手の調和のとれた長い薬指と小指が顕著に見られます。

〔薬指の短縮が意味するもの〕

これとは対照的に、感情の生活や循環器のリズム（血行など）に特別な困難を抱えている場合は、常に薬指の短縮（短くなること）が形として現れます。これに関連する変形（形の歪み）については、多くの場合に同時に変化が現れる「小指」の項目で、一緒に詳しく議論することにしましょう。

〔V〕小指

いわゆる小指は、3つの節を持つ4本の指の中で、文字通り一番小さな指です。形が整った美しい手においては、その構造は非常に調和が取れており、最初の節（基節骨）、2番目の節（中節骨）、3番目の節（末節骨）がだいたい同じ長さになっています（図34）。

薬指の章でも、これら2本の指の間に存在する深い親戚関係について何度も触れました。小指と薬指はどちらも、感受性豊かな人間、すなわち「リズムの人間（呼吸・循環・感情の領域）」と密接に結びついています。いわば、リズムの人間の心の鏡のようなものであり、感情に関するあらゆる場面において、通常はこの2本がセットになってうまく機能します。

〔小指が小さい理由と「親指」との共通点〕

それにもかかわらず、薬指と小指の間には明確な違いがあります。「なぜ小指はこれほど小さいのか」という疑問が湧くかもしれません。

解剖学的な観点から見ると、理由の一つは、小指の最も下の関節が、他の3本の指よりもさらに低い位置（手のひらの深い位置）から始まっているためです。このように、小指はその自然な配置によって、より深く「新陳代謝の領域」へと届いています。これは、さらに高いレベルにおいて親指に言える特徴と同じです。

実は、親指と小指にはいくつかの点で共通する性質があり、それは解剖学的にも証明されています。他の指とは異なり、親指と小指の筋肉組織には、それぞれを他の指と向かい合わせることができる特別な筋肉、すなわち「対立筋」（親指の母指対立筋、小指の小指対立筋）が備わっているのです。さらに、小指の下（手のひらの小指側）には「小指球」と呼ばれる厚い筋肉の層があり、これもまた、親指の下にある厚い肉層（母指球）と同じような構造になっています。

〔小指に秘められた力と音楽〕

このように筋肉がとても繊細に配置されているものの、小指は実はとても「タフで力強い相棒」なのです！

例えばショパンは、かつて自分の指の強さについて尋ねられた際、「力強さという点で一番に挙げるべき親指に次いで、そのすぐ後に来るのは小指である」と断言しました。小指は、生まれ持った筋肉の力によって、お隣の兄弟である薬指に対して、薬指が単独では持ち得ないような「意志の熱」を少し分け与えることができます。解剖学的な観点から見ても、4番目と5番目の指（薬指と小指）は、指を動かす腱が共通の筋肉の塊（筋腹）から枝分かれしているため、特に強く結びついています。その結果、特定の動きはこれら2本の指が一緒でなければ行うことができません。

これらすべての働きは、小指の成長が途中で遅れたりしなければ、正しく機能します。小指の長さがだいたい正常であると言える目安は、「小指の先端が、薬指の一番上の関節のラインを少なくとも少し超えていること」です。

小指においては、人間の魂の繊細な部分が、目に見える形として現れます。小指が薬指とぴったり寄り添っていることは、新陳代謝の領域から体の上へと容赦なく突き上げてくるような、最も本能的・衝動的なエネルギーを、本当の意味での「豊かな感情（情愛）の領域」へと調和させて移行できる可能性を示しています。このことは、時として偉大なバイオリニストの手において、見事に証明されることがあります。ヤッシャ・ハイフェッツの5番目の指（小指）を見てみてください（図43）。

〔【臨床例1】心臓の疾患と指の短縮〕

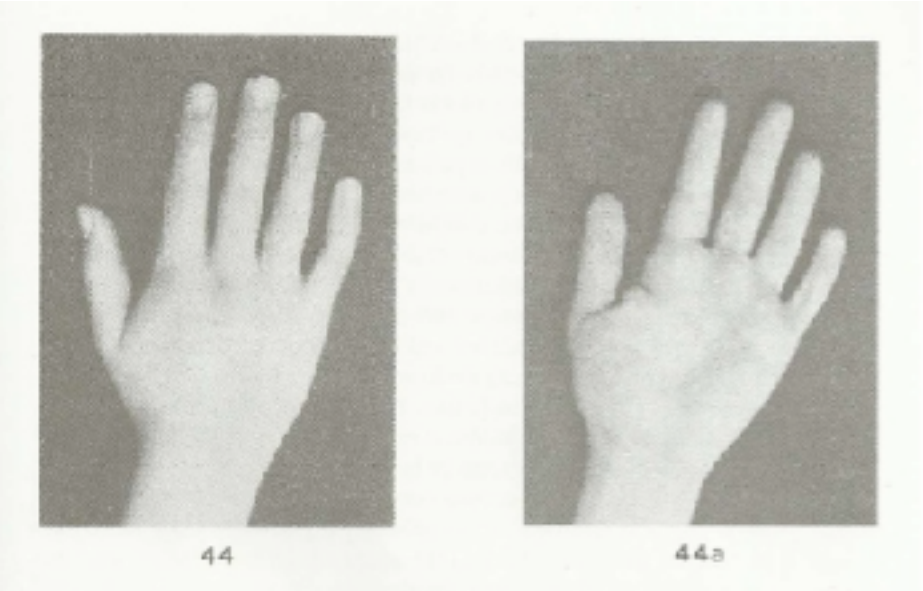
多くの場合、小指が短くなっているのは、中間の人間（リズム系・循環系）の領域に弱さがあることを示しています。ただし、これは多くの場合、大まかな傾向を示しているに過ぎないため、これだけで医学的な診断を下そうと焦る必要はありません。そもそも、この本の目的は診断を下すことではないのです。著者が常に伝えたいのは、「生体のより深い場所にある不調は、手の形にまで刻み込まれることがある」という事実です。

この意味において、生まれつきの奇形（心臓の左心室と右心室を隔てる壁に穴が開いている「心室中隔欠損症」など）の犠牲者であった、ある少年の手は非常に注目に値します。彼は数年前に手術を受け、成功しました。

この男の子の小指は、成長が非常に悪くて短いだけでなく、内側（隣の薬指の方向）に向かってキュッと湾曲して育っていました。このような形態の異常は、呼吸・循環系（リズム・システム）における何らかの身体的な病気の傾向や、感情の生活における精神的な困難に注意を向けさせているのだ、とほぼ確実に言うことができます。ただし、これによって病気の規模や、手術による完治の度合いまでを推し量ることはできません。

このケースにおいて極めて象徴的なのは、小指の変形に加えて、「薬指が人差し指よりも明らかに短い」という、通常ではあり得ない非常に珍しい特徴が現れている点です（一般的なルールでは薬指のほうが長い）。これは、手の甲側（右手の図44）から見ても、手のひら側（左手の図44a）から見ても明らかです。人差し指と薬指のサイズ関係が、通常とは真逆になってしまっているのです。

※（図44、44a）

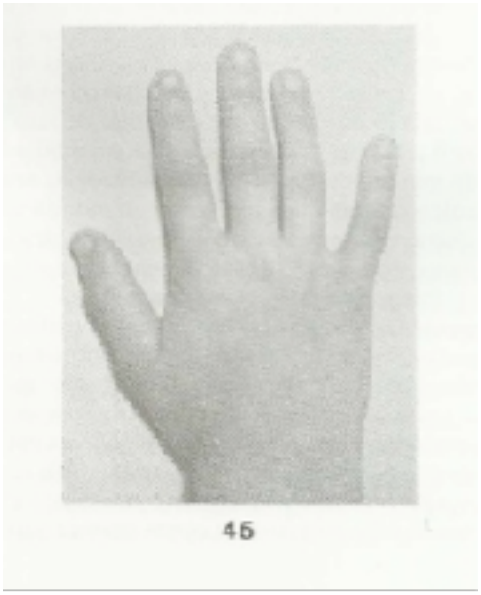


【臨床例2】衝動性と盗癖（図45）

もう一人、指が短くなっている別の少年の例を挙げる必要があります。彼の病的な側面は、自分の手が届く範囲にあるもので、何らかの理由で気に入ったものをすべて盗んでしまうという「盗癖」として現れていました。

彼の感情は、本能的な衝動の影響をあまりにも強く受けすぎています。そのため、彼には責任感というものがほとんど欠落しており、現行犯で捕まったときでさえ、自分が盗んだことを平然と否定します。彼はコントロールを失った本能的な衝動によって突き動かされており、その性質は、最終的には「ひどく噛みちぎられた爪」の形（図45）としても現れています。

※図45



〔教育による克服〕

しかしながら、もしこのような本能の衝動に対して、理解ある教育によって早いうちから対策を講じていれば、このような盗みなどの好ましくない傾向が人生において表面化する必要は決してありません。

なぜなら、教育的なアプローチやエクササイズを重ねることで、人間の内に「強い自己意識を持った意志」が時間の経過とともに育ちさえすれば、魂の底で沸き立っている不穏な無意識の衝動が日の当たる場所に二度と這い上がってこられないように、脅威となる危険をやり過ごすことができるからです。

これまでの観察が教えてくれるのは、小指の爪は、すべての指の中で最も強く下向きに曲がることが多いという事実です。

この事実は、「無意識の領域が感情の中に深く入り込めば入り込むほど、爪の丸みが強く形成される」という、前に説明した法則と見事に一致しています。多くの場合、これはその人の性格の中に、どれほど強く「動物的な衝動」が根づいているかを示すサインにさえなり得ます。小指というものは、その形態において、こうした特徴が最もはっきりと現れる指なのです。

前述の通り、女性のほうが生まれつき爪が丸みを帯びる傾向がありますが、男性であっても小指の爪をかなりの長さまで伸ばしている人を時折見かけます。そうする人々は、――もちろん無意識にですが――自分の内に沸き立っている本能的な衝動を「誇示したい」と思っているのです。現代では、そうした本能にむしろ誇りを持っている人さえよくいます。

一方で、厳格さと結びついたある種の頑固さを特にアピールしたい人たち――これは素朴でシンプルな男性に多く見られます――は、親指の頑丈な爪をできるだけ長く伸ばそうとします。なお、先ほど挙げた私たちの例（図27）は、女の子のものでした。

〔お茶を飲むときに「小指を立てる」仕草の真相〕

ここで、主に小指を使って行われる、ある有名な身ぶりを挙げることができます。

ある人が、紅茶のカップやワイングラスなどを持って持ち上げるとき、まるで痙攣でも起こしたかのように、曲げた小指を他の指から大きく外側へ引き離す（小指を立てる）衝動に駆られることがあります。

その人はこのように動くことで、「私は上品でエレガントに振舞っているのだ」と周囲に見せようとしています。そして、いま目の前にある、これから手にする直接的な快楽（飲むこと）には「私は全く興味がありませんよ」というポーズを取るのです。

しかし、実際のところ、この仕草が表現しているのは次のような本音です。「本当は、この刺激物が欲しくてたまらない。」

小指が指の兄弟たちのコミュニティから離れることで、内なる本能（本音）を表現してしまっているのですが、世間に対しては「私は平然としていますよ」という格好をつけたいがために、このような突っ張った（痙攣のような）動きになってしまうのです。ここには、「快楽への衝動」と「それを周囲に見せたくないという意図」の間に生じている、ささやかではあっても確かな内面の葛藤が、一瞬のうちに露呈しています。

これはとても些細な仕草です。しかし、そこには人間の内なる「隠された本性」が潜んでおり、自分自身をより深く知り、適切に行動できるようにするために、自分でも注意を向けることができるポイントなのです。

〔加齢による指の変形と心の習慣〕

続いて、実際にはある程度高齢になってから表面化する、ある病的なプロセス（体の変化）について、一つの仮説を述べることができるかもしれません。

時として、特定の指の腱が強く縮んでしまい、だんだんと指をまっすぐ伸ばすことができなくなる（※現代医学で言うデュプイヴァン拘縮などの症状）ことがあります。これは、ある種の人々が、かつて食事や飲酒の際などに、一時的かつ半無意識的に取っていた「あの指のポーズ」が、そのまま永久に固定されてしまった状態なのです。

人生の全体を通じて、自分の本能的な衝動をひたすら隠し、目に見える世界の表面に決して這い上がってこさせないように努力し続けてきた人の性格が、まさにその通りに現れているのだと、十分に想像がつくでしょう。若い頃には一時的に簡単に作れていたその姿勢が、老年期になるとその場所でそのまま「固定」してしまうのです。

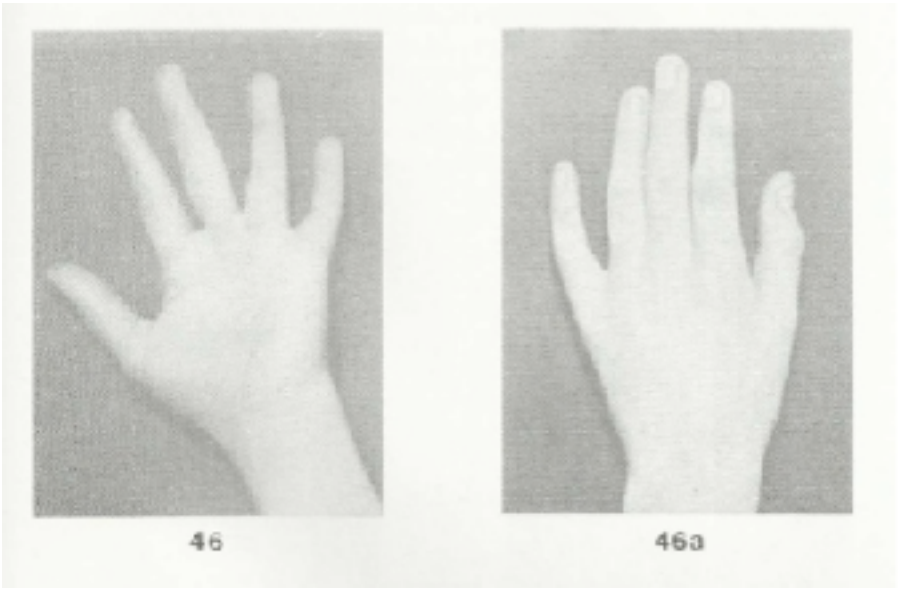
これは、長年にわたって眉間に特定のシワを寄せる癖があった人に、心が完全に穏やかなときであっても、消えない深い溝（シワ）が刻まれてしまうのとよく似ています。それらは永続的なシワとなり、そこからその人の魂の歴史を読み取ることができるようになるのです。

【臨床例3】治療教育が必要な子供たちの手（図46〜48）

小指というものは、まさに「本能的な衝動」と「きめ細やかな感情」の境界線上で繰り広げられているドラマを、最も簡単に映し出してくれる鏡になります。

それゆえに、発達が少し遅れている多くの子供たち（何らかの困難を抱える子供たち）において、小指の明確な湾曲が頻繁に見つかるのです（図46、46a）。

※（図46、46a）



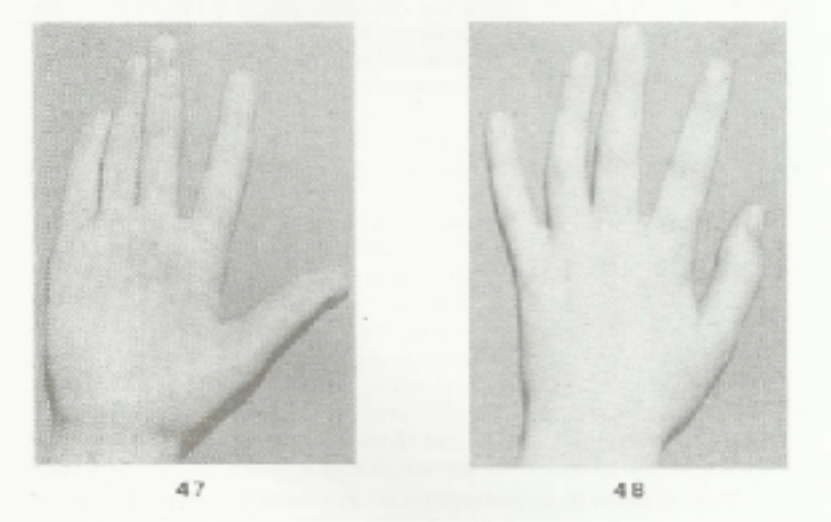
ルドルフ・シュタイナーの精神に基づく「治療教育」において、非常に的確に「魂のケアを必要とする子供たち」と呼ばれる彼らは、自分たちを絶えず支配しようと脅かしてくる「無意識の本能的な衝動」を持っているという点で、とりわけ共通した特徴があります。

多くの場合、それは単に小指が短いということではなく、指先（末節骨）とその関節の曲がり方に問題があります。イラスト（図46、46a）からとても明確に読み取れるように、その指先はほとんどの場合、お隣の薬指の方向（内側）に向かって曲がっています。

ここで改めて強調しておかなければならないのは、外見だけで決定的な診断を下すことは決してできないということです。しかし、身体や心の様々な困難があるとき、例えば小指の形態にこのような変化が見られるのは紛れもない事実です。

すべての感情の動きにおいて困難を抱えているある女の子――ここでは詳しいディテールにまでは立ち入りませんが――の手が、図47と48に再現されています。右手のひら側（図47）を見ると、5番目の指（小指）の指先が薬指のほうに傾いているのがよく分かります。そして、手の甲側が見えている左手（図48）では、小指の緩やかなカーブに加えて、これほどはっきりと現れるのは珍しいくらいのレベルで、「薬指までもがねじれている」のが見て取れます。

※（図47、48）



〔目の弱さ（近視・斜視）やヒステリー傾向との関係〕

また、目に弱さを抱えている人（特に近視や斜視の傾向がある子供たち）においても、小指のこのような変形（多くは指先の湾曲）が現れることは非常に重要であるように思われます。

どちらのケースにおいても、このような子供たちに対しては、「自分の殻に閉じこもろうとする傾向（内自閉的な引きこもり）」を自力で克服できるように、大人が全力を尽くして手助けしてあげることが強く推奨されます。子供たちに対して、自分の周りにある世界への興味をできる限り呼び起こしてあげると同時に、彼らが日々行うすべてのことに対して「内なる真実への愛」を育んであげることが大切です。

子　供の教育に携わるすべての親や教師は、近視の子供がどれほど簡単に「外の世界から一歩退いて、自分の内側に引きこもってしまう」という過ちに陥りやすいかを思い出すべきです。そのことに気づきさえすれば、大人は喜んで、子供のためにできる限りのことを何でもしてあげるようになるでしょう。

さらに、これとよく似た小指の変化は、「ヒステリー傾向」を示す人々にも非常に頻繁に見られます。このケースで言うヒステリー傾向とは、自分の本能的な衝動にあまりにも強く振り回されてしまい、同時に、自分の主観的な心地よさ（自己の健康状態など）ばかりを過剰に気にしてしまう人々のことです。

彼らの豊かな想像力にかかると、どんなに小さな体調の不調（軽い苦情）であっても、簡単に「深刻な大病（苦しみ）」へと仕立て上げられてしまいます。なぜなら、彼らは自分の体の状態のことばかりに意識を集中させすぎてしまうからです。この場合も、後年になってから発症するヒステリーというよりは、生まれ持った「先天的な傾向」であることのほうが大きいです。

これまでに述べてきたことで、小指が（しばしば薬指の形と連動しながら）、いかにその外側の形を通じて「人間全体の人間的な内面」を証明してくれるかが十分に示されたことでしょう。

また、すべての指がどのようにして人間の魂の生き生きとした姿（絵画）を提供してくれるのかも、徐々に明確になってきたはずです。しかし、私たちがこれらの形から「思考」「感情」「意志」の本質を解き明かしたいと願うのであれば、単に形を見るだけでなく、「形」と「身ぶり」をあわせて観察するという努力を重ねる必要があります。

〔VI〕手

観相学の視点から見ると、指を除いた「手」のそのものの部分を理解することも非常に重要です。

内側の面を私たちは「手のひら」と呼び、外側の面を「手の甲」と呼びます。

この指を除いた「手」という部分は、例えるなら「閉じられた花のつぼみ」に似ているかもしれません。つぼみの状態では、すべてがまだ一つにまとまっており、その本質は隠されています。しかし、放射状に広がる花びら――これこそが、外へと放射する「指」に例えられます――がパッと開くことで、それまで隠れて見えなかった内面が初めて外の世界へと現れるのです。手とはまさに「花の萼」のようなものであり、そこから5本の指という扇が放射状に広がっています。

この手という土台は、手のひらの骨（中手骨：図19）によって、非常に精密に作り上げられています。ここもやはり5本の独立した骨からできています。これらの骨は、指の付け根の関節を除いて、外からはほとんど見えません。そのコブの部分から、初めて指がそれぞれの関節を持って繋がっているのです。

〔手に隠された「五角形（ペンタゴン）」の秘密〕

しかし、「手」と「5」という数字（5つの関節の秩序）の結びつきは、それだけではありません。

実は「手」という部分は、両サイドから次のような「五角形」の線によって囲まれていると考えることができるのです。

※（図49）



第1の辺： 第5中手骨（小指の骨）の外側に沿って、小指の付け根の関節（コブ）まで伸びる線

第2の辺： 指の付け根のコブが並ぶラインに沿って、人差し指のコブまで結ぶ線

第3の辺： 人差し指のコブから、親指の付け根の関節（コブ）までを結ぶ線

第4の辺： 第1中手骨（親指の骨）の外側に沿って、下へと向かう線

第5の辺： 手首の関節を横切るようにして、両外側にある中手骨の最も下の2点を結ぶ線

　言葉で正確に説明しようとすると複雑に見えるかもしれませんが、図（図49）を見れば一目瞭然です。この最後に挙げた第5の辺（手首の線）が、手とその先にある前腕との、大まかな境界線になっています。

こ　のように、手が「5つ」の部分に展開しているという事実は、あるときは5本の中手骨を覆う皮膚、靭帯、腱、筋肉の層の下に「隠されて」います。それが外に現れるのは、その延長線上にある、放射状に伸びた指においてのみです。そして、いま説明した「五角形」の形を意識しない限り、それは再び外からは見えないように隠されてしまいます。

〔シュタイナー思想における「五芒星」と生命の力〕

　形が持つある種の象徴性（シンボリズム）に馴染みがある人なら、この五角形が、実は「五芒星（ペンタグラム）」の土台であることにすぐに気づくでしょう。

　五芒星という形は、生命あるものの「形づくる力」と密接に関係しています。

　ルドルフ・シュタイナーは、目に見えない精神世界から、この地上の生命の中へと具体的な形を創り出す「エーテル体」について語りました。ここではその詳細には深く立ち入りません（すべての詳しい内容はルドルフ・シュタイナーの基本文献に正確に説かれています）。しかし、手の形に「5」という数字が深く刻まれていることには、非常に理由がある、という重要なヒントをここに残しておきます。

　なぜなら、十分に訓練された観察眼を持つ医師にとって、「手」というものは、「その人の内に流れる生命の力」をそのまま映し出す鏡に変わり得るからです。

　基本的には、この生命の力は「2つの方向性」に向かって現れることができます。

・一方は、形をしっかりと固めようとする「形成する力」の方向

・もう一方は、絶え間なく変化し、流動し続ける「生命の流動的なうねり（代謝の力）」の方向

　人間の手には、これら2つの対立する力に対応するイメージが、それぞれの手の「面」として見事に現れています。

・手の内側（手のひら）：

いつでも目で直接見ることができる面です。柔らかく、血液が豊かに巡っており、簡単に湿り気を帯びます。その色はバラ色で、時に子供の若々しい頬のみずみずしさに似ています。手のひら側からは、骨の印象はほ

とんど感じられず、筋肉のふっくらとした盛り上がりだけがくっきりと見えます。ここには、血液の巡る「生き生きとした生命の営み」が働いていることを、触るだけで感じ取ることができます。

・手の外側（手の甲）：

これとは全く異なる構造をしています。特に男性においては、ここには1〜2センチメートルにも達する細い、あるいは太い毛が生えています。皮膚は内側に比べてはるかに無骨で乾燥しており、汗をかきません。皮膚を指でつまんでシワとして持ち上げることもできます。中手骨の骨の形を簡単に触って確かめることができ、その上を走るピンと張った腱の動きも、手を動かしたときに直接目で確認できます。さらに、表面に近いところを細い、あるいは太い静脈が流れており、明るい青や濃い青色として透けて見えます。幼児期や若い頃にはほとんど目立ちませんが、年齢を重ねるにつれてこの血管はどんどん浮き出てきて、手のひらのバラ色の輝きとは対照的に、時に皮膚の上に「青紫色」の独特の輝き放つようになります。

これら2つの面の違いをより深く理解するために、人間の三分節化された構造において「腕と手」は、循環（血行）と呼吸に関係する「リズムの中間人間」に属しているという事実を思い出してください。

いま説明した手の両面の特徴から、次のようなことがごく自然に導き出されます。

・手のひらには：
体内を循環する「血液の生命力」が、鏡のように刻み込まれている

・手の甲には：
より新鮮な「呼吸の活動」が、その働きを通じて一種のイメージとして現れている

〔手相に宿る未来の希望とキリストの星〕

このように「手」を観察すること、特にその両面をあわせて考慮することは、ルドルフ・シュタイナーが定義した意味における、人間の形づくる力、すなわち「エーテル体」の本当の反映をそこに見て取ることに他なりません。

これこそが、ここに「五芒星」のベースである五角形が優位に現れている理由なのです。そこには、人間に宿る生命の力が、美しく純化された強さとして真に表現されています。

ペンタグラム（五芒星）とは、「未来」を指し示す象徴です。人間が真の精神的な進歩を遂げるためには、成長の中に現れるこの生命の営みを、より高次のものへと純化していかなければなりません。キリスト教の教えもまさにこのことを指し示しており、救世主キリストの降誕（誕生）を、まさにあの「五つの角を持つ星（ベツレヘムの星）」によって告げたのです。

この清らかな星の光の放射の真ん中に、「純化された真の『自己』の中心」が形成されます。これが達成されたとき、救世主（キリスト）が自ら体験されたように、私たち人間一人ひとりにとっても「精神的な復活（再生）」が可能になるのです。その大いなる姿は、前に提示した素晴らしい絵画（例えば図18など）の中にも見事に表現されていました。

手を深く心を落ち着けて観察していくことは、私たちをこのような深い真理へと導いてくれます。

人間の内に「最も高いレベルの精神性」が花開いたとき、その純粋さの度合いが、「自分の手に美しく描き出すことができる五芒星の、その形の規則正しさと完璧さのレベル」として、目に見えて捉えることができるようになる――いつか、そんな時代がやってくるかもしれません。

〔手と気質〕

●基本的な視点

人智学では、4つの気質は人間の中で働く4つの元素と結びついている。
その働きは動きだけでなく、手の形態にも痕跡を残す。

手は意志・代謝・神経系・自我の働きを外に示す器官であり、
気質の「熱・空気・流体・固体」の質が、
指の長さ・太さ・硬さ、親指、手のひらの五角形／五芒星、
皮膚や骨の様子などに現れる。

病気や天才性も同じ形態関係の中に刻まれるが、
気質そのものとの内的つながりは保たれる。

●要点

〔胆汁質（熱・火）〕

・熱の元素が強く、血液が手へ速く流れ、手が温かい。
　興奮すると拳を握る、机を叩く、平手打ちなど、
　意志が腕・手へ一気に流れ込む。

・手は小さく頑丈。
　親指が最も特徴的
　（平らな爪、丸い指先、短く幅広い基節、硬い母指球）。
　他の指も基節が筋肉質で短い。

・手のひらの五角形は整い、美しい五芒星を描ける。
　自我が身体を強く掌握しやすい。
　忍耐強く手際のよい労働もできる一方、
　代謝過負荷（例：胆石）のリスクもある。

〔多血質（空気）〕

・敏感な神経系と空気元素。
　指は常に動きやすく、子どもは触りたがり、
　大人は指で机を叩いたり、口笛・ハミングで興奮を発散する。

・指は長く繊細で先細り（特に人差し指・中指）。
　親指は胆汁質ほど肉厚でない。
　手のひらは縦長で、五角形／五芒星も縦に伸びる。

・胆汁質の「力強い発散」と対比される、
　軽やかで神経質な可動性が特徴。

〔粘液質（流体・水）〕

・液体・建設的代謝と強く結びつき、
　食飲を好み、身体が横に広がり脂肪がつきやすい。

・指は短く弛緩し、筋肉より脂肪が目立つ。
　親指も短く意志が弱い。
　関節が柔らかく伸びやすく、爪は平らで軟らかい。
　爪噛みが比較的多い（硬化する要素を拒む）。

・手は幅広で短い（多血質の逆）。
　発達の遅れのある子どもにもこの痕跡
　（弛緩した指、噛まれた爪、関節のくぼみ、柔らかい親指）が見られやすい。

〔憂鬱質（固体・地）〕

・固体・鉱物的なものが強く働き、手が「重い」。
　指は長いが先細りせず、きゅっと握りしめ、互いに支え合う。
　骨・関節が際立ち、皮膚は青白く冷たい。
　若くても老けて見えやすい（重力への依存）。

・二つのタイプ：
　１）繊細な手先の仕事をする人（例：ショパン型）
　　――長く美しいが重く、骨と腱が浮き、指が中指側へ傾く。
　２）繊細作業をしない人
　　――がっしりし、関節が太く「太鼓バチ状」に見えることもある。
　　呼吸で空気を長く留め、うっ血が指に反映する、という解釈。

・手のひらの五角形は不規則で上方へ歪み、五芒星の光線も目立たない。
　重い性質が図像にも現れる。

〔全体（補足）〕

気質は「動き」と「かたち」の両方に出る。
親指は代謝・意志と最も近い。
手のひらの五角形／五芒星は気質ごとの調和・伸長・歪みを示す。
形態は気質そのものだけでなく、病気や個性の刻印とも重なるが、
元素との内的関係は一貫する。

●本文

〔I〕

　人間の気質は、単に動きを通じてだけでなく、その形態を通じても、手にその痕跡を残します。気質について扱った書物で述べられている内容は、手に関しては、さらに特別な補足を必要とします。ルドルフ・シュ

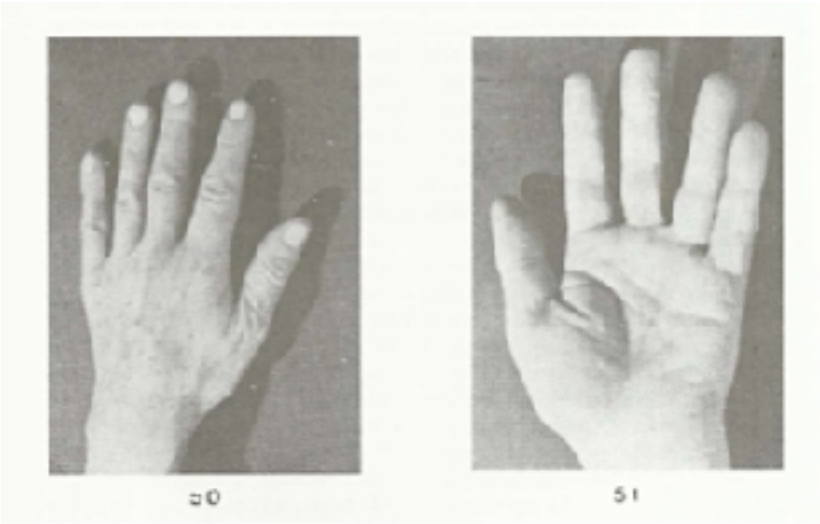
タイナーによる気質論の刷新は、4つの気質と、人間の中にも働いている4つの元素との間に存在する結びつきを理解することを可能にしました。

胆汁質の傾向を持つ成人にとって知っておくべき重要なことは、彼らの中では「熱」の元素が特に強力に発達しており、その結果として、さまざまな現象となって現れるということです。例えば、胆汁質の人では、温かい血液が非常に速いスピードで上方へと流れることがあります。そのため、彼らはよく「頭に血が上りやすい」と言われるのです。当然のことながら、この気質においては、血液は手に向かってもより速い速度で流れ、そこに留まります。したがって、胆汁質の人は病気でない限り、ほとんどいつも手がとても温かくなっています。

その結果、手もまた、より素早い活動へと駆り立てられます。なぜなら、熱とともに、人間の意志も同様に器官の内部へと流れ込むからです。胆汁質な気質を持つ人が興奮すると、手を使ってあらゆる身振りをします。例えば、拳を握り締め（図4）、机を叩いたり、あるいは攻撃者に対して実力行使に出る（殴りかかる）ことさえあります。生徒たちに煽られた胆汁質の教師は、瞬く間に指先にまで達する熱の波に満たされ、激昂するあまり、強烈な平手打ちを食らわせようと手を振り上げることになるでしょう。

意志をこれほど素早く腕や手へと送り込むことのできる胆汁質の人は、一般的に、自分が成し遂げたいと思うことを忍耐強くやり遂げる、手際のよい労働者になる能力も備えています。身体の他の部分と同じように、彼らの手は、確かな「頑丈さ」を伴った、ある種の「小ささ」という印象を与えます。この特徴は親指に最もはっきりと現れます。なぜなら、親指は血液や代謝の領域と最も深い結びつきを持っているからです。第一指節（爪のある関節）は、通常は平らな爪をしていますが、指先は際立って丸みを帯びています。それに隣接する基節（付け根の関節）は、幅は広いものの、どちらかと言えば短くなっています。筋肉組織がほぼ常に力強く発達しているため、親指の膨らみ（母指球）は固く、引き締まっています。胆汁質の傾向を持つあるピアニストの手（図50および51）は、胆汁質な気質を持つ人間の典型的な手の優れた例を示しています。彼の親指は、「胆汁質的な」指に求められるあらゆる条件を満たしています。

※（図50および51）



この芸術家もまた、かつてショパンがそう語ったように、演奏するときには親指に最大の力がこもると言うでしょう。しかし、この事例においては、他の指もまた、基節（付け根の関節）が特に力強く発達していることを示しています。これらの関節は非常に筋肉質で、やや短く、まるでそれ自体が凝縮されているかのようです。これら4本の指の「三分節化された構造」という観点から見ると、まさに代謝・意志有機体へと結合している部分が、特に力強く発達しているのです。

人差し指の第一指節（基節）には、これが特に際立った形で現れています。このような個性においては、思考のエレメントが、いかに強く意志という無意識の領域へと没入しているかを、その人差し指から容易に見て取ることができるでしょう。注目すべきは、すでに美しく形成されている小指であり、薬指とともに、高貴で深い魂を告げています。これは音楽家にとって非常に価値のあるものです。

同じ図には、まさに胆汁質に特徴的な手のひらが見られます。そこに描き出すことのできる五角形は規則的な形をしており、美しい輝く星（五角星）を生み出すことができるほどです。これに関連して、おそらく一つの解釈を付け加えることができるでしょう。なぜなら、それはこれまでに提示されたすべての事柄に、まるで自然に収まるかのように合致するからです。ルドルフ・シュタイナーは、例えば胆汁質の場合、彼らを深く貫いている強い熱の発達によって、その人の個性、すなわち「自我」がいかに身体を完全に掌握し得るかを示し、気質の理解に大いに貢献しました。そのため、いわば地上で自らの行動を正しい成就へと導くことのできる偉大な人物たちは、しばしば胆汁質な気質に傾く傾向があります。少なくとも、ヘンデルやベートーヴェンという2つの例を挙げるだけでも、この気質がしばしば最前面に現れていることが分かります。

医学的な観点からも、ある条件下では、胆汁質の人が自分の代謝に過度な負担をかけ、それが病気へとつながる可能性があることを改めて記憶にとどめておくことが重要です。その場合、彼は例えば胆石症を患うことになります。手には、天才性、病気、あるいは単に気質そのものが刻印されることがありますが、どのような場合であっても、ここで記述された形態との内なる密接な関係は存在し続けるのです。

II

多血質の傾向を持つ人間は、特に敏感な神経系のシステムによって特徴づけられます。自然の元素（エレメント）という観点から見ると、彼らは「空気」と最も親密な結びつきを持っています。これに関する詳しい詳細については、前述の気質に関する書物を参照する必要があります。ここでの主な目的は、この気質が手にどのような形態を刻み込むかを認識することにあります。

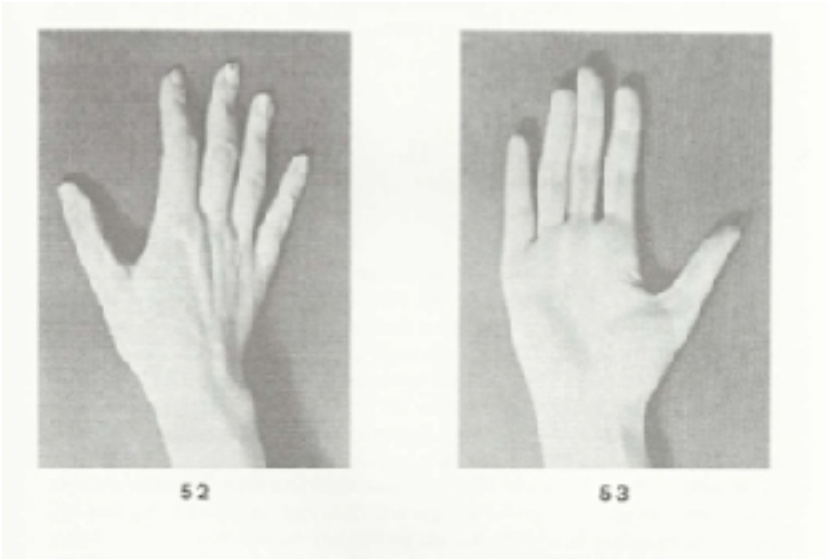
多血質の人の指は、その「動きの多さ」によって、何よりもまず神経系の繊細な性質を露わにします。子どもの手は常に動いており、教師が多血質の生徒たちの注意をうまく惹きつけられないときには、彼らを絶望の淵に追いやることもあります。なぜなら、比喩的に言えば震えるような神経系によって容易に引き起こされる衝動に突き動かされ、指であらゆるものに絶えず触れていたくなるからです。大人になると、その疲れを知らない活動の様子は、例えば次のような形で現れます。彼は椅子に座り、前腕と手をひじ掛けに休ませると、指でそっと、あるいは音を立ててパタパタと机やひじ掛けを叩き始めます。これは、特に何かを待たなければならないときに、いとも簡単に起こります。まるで、手や指を動かすことによって、内面の落ち着かなさから自分を解放しようとしているかのような印象を与えます。

これとは対照的に、胆汁質の人は、蓄積された不満をもっと力強い方法で発散します。つまり、拳で机を叩くのです。多血質の人においては、特別な教育によって強制的に抑え込まれていない限り、静かにハミングしたり、大声で口笛を吹いたりして興奮を発散する姿も珍しくありません。この口笛や歌は、ほとんどの場合、無意識のうちに行われます。多血質の人間に非常にポピュラーなこれら2つの表出（口笛と歌）が、まさに彼らの有機体と特別に結びついている「空気」のエレメントの中で展開されているということは、忘れてはならない重要な点です。

「多血質」の指を「胆汁質」の指と並べて観察することは、非常に示唆に富んでいます。前者は、繊細であると同時に細長い形態を通じて、その気質の持ち主の性質を直接的に表現しています。指は長く、きめ細かに作られています。「感覚器官の指」である人差し指と中指は、その「神経質」な性質を、やや先細りになった第二指（人差し指）において特に際立った形で示しています（図52および53）。親指そのものも、肉

厚で凝縮された（胆汁質のような）本質をいくらか失っています。この形態は、プロのヴァイオリニストにとって大きな利点となることがあります。ここで、ヤッシャ・ハイフェッツの指（図43）に目を向けてみるとよいでしょう。

※（図52および53）

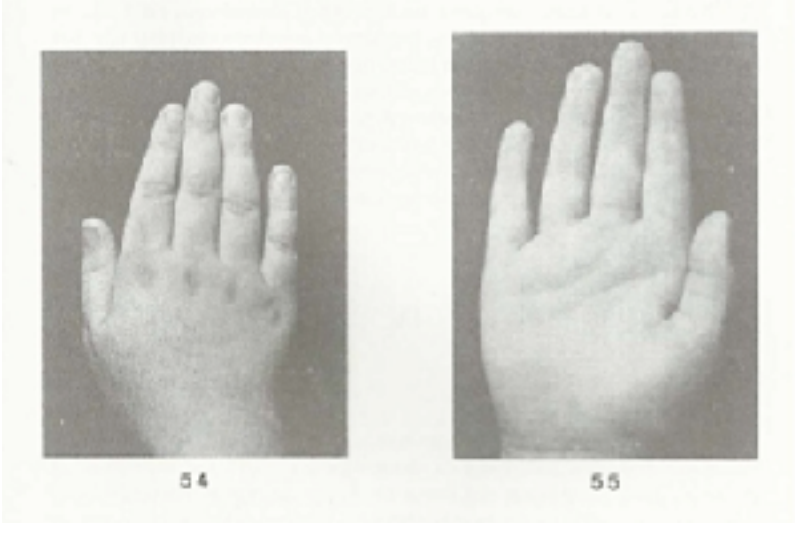


多血質においては、「手」全体の形態も特に特徴的な形で現れます。これは手のひらを見れば容易に発見できます。手のひらは、幅よりも長さの方がはるかに長い、縦長の形をしています。これに対して胆汁質では、縦と横の長さがほぼ等しく、わずかに異なる程度です（図51）。多血質の手のひらに描き出すことのできる五角形は、横から押しつぶされたように狭く、しかし上方へ向かって大きく引き伸ばされた形になります。したがって、その中にある五芒星（五角星）も縦にいくらか引き伸ばされた形になり、ここでも胆汁質の手の星とは全く異なる図形が生じることになります。

◇

粘液質の人間は、有機体の中の「流体」の媒体と非常に強く結びつくという特性を持っています。彼は身体の「建設的な代謝プロセス」に満ちあふれた関心を持って生きており、そこから、食べることや飲むことに関わるすべての事柄に対する際立った愛を発達させます。その結果、しばしば身体は横へと広がり、簡単に脂肪を蓄積することになります。そのため、その指（図54および55）は繊細には形作られていません。比較的短いものの、胆汁質のように固く引き締まった印象は与えず、むしろ「弛緩して」います。実際、筋肉よりも脂肪の方が発達しているのです。

※（図54および55）



粘液質によく見られる「意志の弱さ」に対応して、ほとんどの場合、親指も短すぎる形になります。この気質にしばしば見られる「柔らかい関節」は、あの有名なマリオネットのように、多かれ少なかれ簡単に伸びきってしまうということを忘れてはなりません。粘液質の人は、まさにその手の構造において、あらゆる緊張感の欠如を示しています。爪でさえも、通常は平らでしなやかです。

相対的に多くの「爪を噛む人」が見つかるのは、まさにこの粘液質の間においてです。水的なものや、流体の媒体の中で展開される代謝プロセスに対してこれほど大きな好意を持つ有機体が、爪の形成という形で現れる「硬化させるエレメント」を絶えず取り除きたがるのは、理解できることです。この文脈において、爪を噛む物質（角質）が見当たらなかったために爪噛みにならなかった、ある粘液質の人について言及することができます。非常に奇妙なことに、その爪床は、硬化した爪を成長させる条件さえ備えていなかったのです。本来の細胞から、健康な爪の代わりに柔らかい塊だけが形成され、それは指先付近にまで成長することさえできませんでした。どれほど時間をかけた治療であっても、この先天的な状態を変えることはできなかったでしょう。この人間の粘液質な性格は、過剰なまでの食欲によっても明らかになります。その身体にどれほど多くの脂肪が蓄積されていたか、驚くにはあたりません。

発達の遅れが見られる子どもの中には、その身体構造に粘液質な気質の痕跡を留めている者が多く見られます。手においては、指の一本一本が、いかにその形態が弛緩しており、不格好に形成されているかを明瞭に示しています。しばしば噛まれている爪は、はっきりと目立ちます。手の甲の関節（指の付け根）の上には、通常は乳児期などの幼い盛りに見られるような、小さな「くぼみ」が形成されます。肉厚でスポンジのように柔らかい親指は、粘液質の人が非常に多くの場合に持っている「弱められた意志」を物語っています。手の甲から見ても手のひら側から見ても、手そのものは幅よりも長さの方がはるかに短く、まさに「多血質」の手とはほぼ正反対です。また、胆汁質の手の、より規則的でほぼ調和の取れた輪郭とも明確に異なっています。

IV

憂鬱質の気質を持つ人々の場合、自然の元素の中では「固体」および「地・土」の要素が、有機体の中で最も強く働きます。これも当然のことながら、手に反映されます。

憂鬱質の人の指は、多血質の場合と同様に、通常は長いのですが、これら2つの気質の間には、手の形態に実に大きな違いが存在します。多血質の美しく細い手が、常に軽やかな動きへの傾向を示し、まるで飛び立とうとする鳥の羽のように広げることを好むのに対し、憂鬱質の人は指を細く固く「きゅっと握りしめる」ことを好みます。彼は常に自分の手を支えてくれる土台を求めており、危険な瞬間に互いに身を寄せ合う怯えた動物たちのように、指と指を互いに支え合わせます。

その形態から、憂鬱質の手は基本的に2つのタイプに分類することができます。

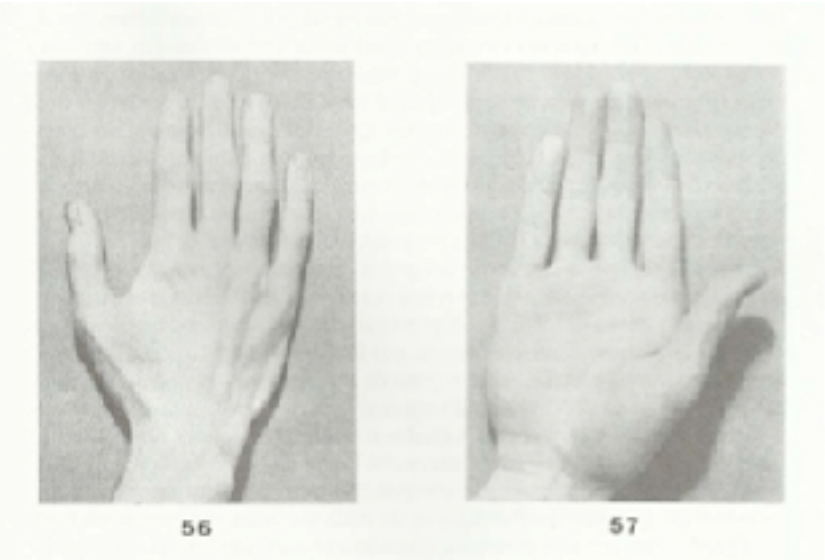
最初のタイプに属するのは、ショパンの手です（型から取られた左手が図42に見られます）。それはピアニストの手らしく、当然ながら非常に美しく形作られていますが、この気質特有の兆候が鮮明に現れています。指はかなり長いのですが、多血質のように指先（末節骨）が細くなっている箇所がどこにもありません。そのため、「憂鬱質の手」は「重さ」という印象を与えます。

さらに、憂鬱質においては、骨（特に関節部分）が非常に際立って目立ちます。骨そのものは、身体の中で最も固く、同時に最も鉱物的な物質の一つです。物質的で固いあらゆるものと非常に近い親縁関係にあるこの気質は、この骨の性質に最大の愛着を持って寄り添います。時に、中手骨（手の甲の骨）の裏側がこの

事実を示し、まるで骸骨のような効果を生み出すことさえあります。これに加えて、ほとんどの場合、青白く冷たい皮膚となっています。

「憂鬱質の手」のイメージは、図56と57にもはっきりと見ることができます。これらの指には、特に特徴的な現象が認められます。非常に際立った骨の形態に加えて、縦方向に伸び、より多くの腱が貫いている筋肉組織のせいで、指節（関節と関節の間）の一本一本の形成が、他の手よりもはるかに強く浮かび上がっています。これらの手においては、骨格の解剖学的な分析がいとも簡単にできてしまうほどです。

※（図56および57）



示されている例からは、以前に別の文脈で言及された事柄を非常によく認識することができます。すなわち、人差し指が緩やかな弧を描いて中指側（外側）へと傾いている一方で、薬指も同様に中指側（内側）へと向かって傾いている様子です。親指の関節も、手の甲側から観察される中手骨と同様に、際立って突き出ています。そのため、まだ若い人の手であるにもかかわらず、手全体が老けて見えます。これは、身体が地球の重力に依存しているために、若さの力を早々と失ってしまう危険にさらされている、憂鬱質の人の気質に対応しているのです。

◇

憂鬱質に見られるもう一つのタイプの手は、上述したものとははっきりと区別されます。これはほとんどの場合、上肢（腕や手）のより繊細な活動（ヴァイオリニスト、ピアニスト、技術者、および同様の手先の器用さを要求される職業など）に関わりのない仕事をしている人々に見られます。指を使った繊細な作業を行わない人々、例えば商人、言語学者、哲学者、あるいは未熟練労働者などで憂鬱質な気質を備えている場合も、やはりその手に非常に特徴的な形態を発達させます。

実際、彼らも細長い指と、青白く羊皮紙のような皮膚を持っていますが、手の一部分ずつの表現力は乏しくなります。手はよりがっしりとしており、実際には病気ではないものの、関節が太くなっています。これらの骨の膨らみが特に目立つ場合、遠目にいわゆる「太鼓のバチ状の指（撥状指）」を連想させることさえあります。

これらのより顕著なケースでは、関節の周囲の柔らかい領域も一部肥大しています。このような形態は、憂鬱質特有の「呼吸の仕方」と深い関係があるのではないか、という問いが生じるかもしれません。彼の呼吸は次のように行われます。彼は息を吸い込むと、肺で今しがた吸い込んだものをそれほど早く手放したくな

いかのように、体内に長く空気を保持します（息を止める）。当然、最終的には再び息を吐き出す必要があります。彼はしばしば断続的に息を吐き出し、時折、ため息を伴って呼気を行うことを好みます。ここには、自分が今しがた親密に関係を持ったもの、つまり、吸い込んだ空気を再び返さなければならないことに対する、ある種の切なさが隠されています。

　言うまでもなく、これらすべては意識の閾値の下にとどまっており、おそらくはたまに起こるだけです。しかし、一度所有したものは、それがたとえ自分が吸う空気であってさえ、何一つ手放したくないという憂鬱質の魂的な姿勢に対応しています。記述したような呼吸が習慣になると、やがて肺の中に微量ではあってもある種の滞留が生じます。これが血行に逆作用を及ぼし、それが今度は指に反映されて、擬似的な「太鼓のバチ状の指」とでも呼べるような形に指を形成していくのです。

「　憂鬱質」の人の手のひらにも描き出すことのできる五角形は、非常に不規則で、上方へと引っ張られた歪んだ形をしています。その五角形を土台として生み出される五芒星は、目立つような、長く伸びる星の突起をつくりません。憂鬱質な気質の持つ「重い」性質が、この手のひらの図像の中にも優勢に現れているのです。

〔左手と右手の協力関係〕

●基本的な視点

手を理解するには形態だけでは足りず、
身振りの霊的根拠を見る必要がある。

シュタイナーの示唆によれば、
左手には主に過去の運命（カルマ）が、
右手には主に現在と将来の活動が刻まれる。
両手の協力は、この「左＝過去／右＝現在・未来」が出会う仕方を示す。

出会いの場は身体の正中線、とりわけ中間の人間（リズム系・心臓）。
過去の自我と現在・未来の自我が結びつくとき、
人は自分を一つの統一体として感じる。
祈る・組む・こする・腕組み・後ろ手・絶望・聴く・語るといった身振りは、
すべてこの左右・運命・意志／感情／思考の関係の外化

●要点

〔左右の根本〕

・左手＝過去の運命、右手＝現在・将来の活動。
　両手の協力を読む鍵。
・統合は正中線・心臓（血液が集まる場）で起こる。
　そこで初めて「完全な人間」として感じられる。

〔祈り（両手を合わせる）〕

・正中線で左右が出会う。
　過去の自我と現在・未来の自我が結びつく。
　理想は両手のひらと「自我の点」が重なり、5本の指がすべて合う。

・デューラー型：指が垂直に高みへ向かい、世界霊への純粋な献身。

・指先／第一指節だけが触れる型：
　関与が薄く、主に頭部（思考）だけの祈り。指は斜め前方へ低く向く。

〔指を組む内省〕

・指は上方へ向かわず水平に曲がり、基節（意志の部分）同士が押し合う。
　内面へ引きこもり、内省の力を集める。

・組み方の二種：
　左親指が上（過去の運命により身を委ねる）／
　右親指が上（未来の行為・新しい運命へ向かう）。

左利きでは逆転しうるが経験は乏しい。

〔両手をこする（演説前など）〕

・親指と四分節の4本の指という手の二重性が関与。
中間の人間（血液循環と呼吸）の働き。
一種の「心肺運動」。熱を手へ送り、呼吸を強めて血液を更新する。

・演説者は無意識に、心肺のリズム＝心から語る準備をする。
重い物を持つ前にも勇気を呼び起こす。

・話し終えた後の「冷静を取り戻す」組み方：
感情・意志の湧き上がりを内で鎮め、決断前の静けさを求める。

〔絶望〕

・指の組み方は内省の祈りに似るが、
手のひらは外（前方）へ向け、腕は突っ張る。筋肉は指先まで緊張。

・思考・感情・意志がねじれ、自我は身体の外へ追い出されたように感じる。
「自我の点」が出会わない。本質の喪失が手に現れる。

〔聴くときの腕組み〕

・前腕を正中で交差させ、右手が左腕を、左手が右腕に閉じ込められる。
自我の中に引きこもり、感情をロックする「甲冑」。

・右手が自由なら「今と将来の反対」、
左手が自由なら過去のカルマからの肯定／否定が漏れうる。
それを封じ、第一印象に感情で流されないようにする。
さらに足を組むと意志の介入も抑える。
開くときは交差を解き、拍手などで中間の人間が再び働く。

〔手を使わない／ポケット／後ろ手〕

・演説で手を全く使わない：リズムの人間（情動）を表に出したくない。

・南欧的な大きな手振り：感覚魂から強く生き、言葉に感情を込める。

・ポケットに手：立つ人に多く、感情も意志も動かしたくない。

・後ろで手を組んで歩く：胸を前方で自由にし、呼吸を妨げない。
右手が左手を優しく抑える（未来が過去を静める）。
思考が感情のリズムと血液の熱で満たされる。
腕組み座位の「感情ロック」と正反対。

・対比：
前方で腕を組むナポレオン（抑圧）／
後ろ手で歩くベートーヴェン（精神的自由）。

〔ラファエロのパウロ二様 〕

・『聖チェチーリア』：
感覚する人間。
天のイメージと響きを静かに受ける。
右手が顎を挟み、意志と言葉を意識的に沈黙させる。
冷酷さのない聖なる静けさ。

・『アテネでの説教』：
かつて受けたものを意志の炎として解放する。
腕は上方へ伸び、両手のひらは向かい合うが触れない。
見えない光線の中心で聴衆を包み、感じる存在の中心へ招く。
狂信ではなく、愛に支えられた召命の意志。

〔全体〕

左手（過去）と右手（現在・未来）が、
中間の人間でどう出会うか／どう遮断するかが、
祈りの統一、内省、勇気、絶望、客観的聴取、
思索の散歩、沈黙の受容、宣言の愛を区別する。

●本文

〔I〕

手を理解するためには、単にその形態を知るだけでは不十分です。多くの人々に見られる特定の象徴的な身振りの奥にある、精神的・霊的な基礎を深く探ることも求められます。

言及に値するさまざまな身振りについて扱う前に、手における左側と右側の違いについて、いくつかの観察を行っておく必要があります。かつてルドルフ・シュタイナーが医学講義の中で示したある示唆は、「左と右の謎」に関連する事柄をより容易に理解するための大きな助けとなります。彼の説明から明らかになったのは、左手には何よりも人間の「過去の運命（カルマ）」に由来するものが刻まれるのに対し、右手には主に個人の「現在および将来の活動」に関連するものが刻印されるということです。ここで私たちは、当然ながら運命という視点を考慮に入れています。この鍵となる思想を出発点とすることで、両手の間に見られる協力関係について、いくつかの解釈を明らかにすることができます。

〔II〕

祈りの行為において、熱心な献身のもとに合わされた手は、間違いなく最も美しく、最も印象的な身振りの一つです。この感情の中にいるとき、人は自分自身が「完全な人間」であると感じ、悪人からさえも敬意を呼び起こすことがあります。個は何よりもまず、完全に自分自身だけになり、自らの神へと近づき、信仰をもって向かう先の「世界霊」へと没入することを望みます。

その外面的な姿はどのようなものでしょうか。祈りにおける両手は、身体の「正中線」の領域でぴったりと合わせられます。したがって、これはまさに左側と右側が出会うその場所で成就するのです。この図像は、祈りにおいて、個人のうち「左側からやってくる、過去の運命を担う部分」が、「右側からやってくる、現在および未来」といかに出会おうとしているかを形にしています。

人間は、これら個性の2つの部分が少なくとも特定の時間だけでも統合されて初めて、自らの存在を「一つの統一したまとまり」として理解することができます。本質的に、これが起こり得るのは「中間の人間（リズム系／胸の領域）」においてのみです。なぜなら、あらゆる方向から流れ込むものが血液の中に存在する場所こそが、心臓だからです。私たちは、この鼓動する心臓において、初めて自分自身を「完全な人間」として感じることができます。だからこそ、祈りにおいても、左手と右手はまさに真ん中の空間で出会うのです。

本物の祈りが流れる中で、いわば「過去の自我」が「現在および未来の自我」と結びつきます。理想的な祈りの姿勢では、一方の手の5本の指すべてが、もう一方の手の5本の指と合わさります。両方の手のひらがしっかりと触れ合い、本著の別章で「自我の点」として記述された、互いに対向する位置がほぼ重なり合います。

ウィーンのアルベルティーナ美術館に所蔵されているデューラーの絵（図58「祈る手」）では、右手の小指が少し持ち上がっているものの、両手が合わされている様子がよく分かります。これに加えて、指先、あるいはせいぜい指の第一指節（爪のある先端の関節）だけが触れ合う、もう一つの祈りの姿勢もあります。この姿勢では、人間全体としての関与がより薄いように思われます。指の最上部の関節に関するこれまでの説明に沿うならば、私たちはこれを「思考だけで行われている祈り」とさえ呼びたくなるほどです。ここに関与しているのは、主に、あるいは頭部の人間だけであるように見えます。

※図58



この身振りと対照的に働くのが、やはり両手は合わされているものの、魂の他の領域が影響を及ぼしている手の姿勢です。デューラーのデッサンにおいては、祈りはまだ完全な純粋さの中に生きており、世界の高みにある霊へと向かうことを望んでいます。そのため、指も神聖な力へと近づくために、垂直な姿勢で高みへと憧れ求めています。これに対して、指先だけが触れ合う「知的」な姿勢においては、指がより斜め前方へと低く向けられていることに気づくでしょう。

〔III〕

人間が何よりもまず自分自身から解放されるこれら2つの姿勢とは異なり、指が互いに組み合わされるようにして両手が合わされた別の状態（図59）は、区別して考慮されなければなりません。

※図59



したがって、これらの指は決して上方や身体から離れた方向へと向けられることはなく、多かれ少なかれ力強く曲げられた状態で、すべて水平に休んでいます。このようにして、右側の各指は、反対側の対応する指に対して押し付けられます。ここで特に観察に値するのは、それぞれの「基節（付け根の関節）」が互いに圧迫し合っているということです。つまり、それぞれの指の「意志の部分」に関わる箇所です。私たちはこの身振りによって、自らの意志が宿る「内面」へと向かいます。私たちは「内省の力」を呼び集めるのです。

これを行うことができるように、一方向の指は、自分を支えるために反対側の「兄弟である指」に対して押し付け合います。これは、祈りが静寂の中で上方へと向けられ、指がただお互いを軽く支え合いながら、実際にそれぞれが文字通り高みを目指して努力しているあの姿勢とは、異なる魂の姿勢なのです。

この指の組み方には、2つの方法があります。

より頻繁に見られるのは、左の親指が右の親指を上から押さえ、左の人差し指もやはり上から右の人差し指を締め付ける、といったように、他のすべての指についても同様に行われる組み方です。この状態では、左の親指が一番上に、右の小指が一番下になります。これは、イーゼンハイム祭壇画の詳細である図59、すなわちマグダラのマリアの合わされた手にも見ることができます。

しかしながら、これとは逆に、右の親指が一番上になり、左の小指が一番下になるように姿勢が取られることもあります。これら2つの指の組み方の違いは、左と右の意味に関連しているのではないか、という推測を立てることができます。もしその人が、魂の内省において、過ぎ去った運命（過去のカルマ）から生じるものにより身を委ねているならば、おそらく右手の上に左手の指を感じることを望むでしょう。あるいは、自らの行為を通じて新しい運命を創造するために、感情を未来へと向けたいという明確な憧れが完全に潜在意識の中で浸透している場合、この図像は変化します。すなわち、右の親指が上に置かれ、左の小指が下に位置するようになるのです。

左利きという比較的まれなケースにおいては、この状況が完全に逆転して起こる可能性もあります。しかし、これは既知のいかなる経験の範囲も超えた事柄です。

◇

一部の演説者においては、彼らが自らのスピーチを開始する前に、独特の方法で両手をこすり合わせるという、両手のまた別の戯れを観察することができます。その動きは手を洗う様子を連想させます。

彼らは例えば、右手のひらを左手のひらの上に重ねます。そうすると、下に位置する左手の4本の指が、右手の甲を上から掴む形になります。同時に、右手の指は、下を向いた左手の甲を包み込みます。一瞬間、手のひらの真ん中同士が互いに重なり合います。そして、右の親指が左の親指を外側から抱きかかえ、右手の他の並んだ指は親指を内側で捉えます。左手の4本の指は、下から右手の甲の上へと滑り、右手の甲は回転するような動きで左手のひらへと親密に寄り添います。最後に、右手の指が左手の甲を下方から上方へと動き、再び親指を包み込む動きを開始します。

この正確な記述においては、これらすべてがいくらか複雑に聞こえるかもしれませんが、多くの人々が手を洗うときだけでなく、冷たい手を温めたいときに行う非常に単純な動きです。

ここで、先ほど言及した、手をこすり合わせる演説者に再び目を向け、その身振りを理解しようと試みてみましょう。

記述した仕草において本質的なのは、それが手に備わっている「二重性」から生じているという点です。すなわち、一方では「親指の関与」であり、もう一方では「三分節を持つ4本の指の関与」です。したがって、ここに関与しているのは、何よりも「リズム人間」、つまり「中間の人間」です。そこでは、血液の循環と呼吸の活動が支配的な役割を果たしています。手をこする行為によって、人は適切な血液循環を促そうとします。必要な熱が手へと運ばれなければならないのです。しかし同時に、呼吸もまた強化された形で関与しなければなりません。なぜなら、それによって初めて血液が新しく生まれ変わることができるからです。だからこそ、左右のそれぞれにおいて、三分節構造の4本の指と親指が、互いに能動的な関係に入るのです。この身振りは、まさに手による一種の「心肺運動」であると記述できるでしょう。

では、私たちが言及した演説者は、一体何を望んでいるのでしょうか。当然のことながら、彼は――もちろんその瞬間に彼が意識しているわけではありませんが――何よりもまず、自らの「中間の人間」から、すなわち心肺のリズムから、自らの内面から語ることを意図しているのです。これが実際に成功したとき、彼は感情の持つ「心からの温かさ」と、そこから勇気を生み出す「呼吸の力」の両方に満たされて語ることになります。演説者が話し始める前に、両手を力強くこすり合わせるという、一見小さな「前奏曲」の中には、これらすべてが準備され、隠されているのです。彼は、プレゼンテーションの合間に挟む短い沈黙の間にも、まだこれを繰り返しているかもしれません。

また、手をこすり合わせることによって、自分の中に力強い勇気を呼び起こそうとしているという印象は、次のような状況にも現れます。誰かが非常に重いものを持ち上げるという課題に直面したとき、それに向けた活力を刺激するために、あらかじめ両手を力強くこすり合わせます。これは例えば、家具の運搬人たちの間で好まれている習慣です。

ついでながら、ここで言及するに値するもう一つの動きは、先ほど記述した演説者が話し終えて「冷静さを取り戻す」ときの仕草です。一方の手が上に、もう一方の手が下に置かれ、上の4本の指が下の手の甲を掴み、同様に下の指が上の手の甲を掴みます。その間、両方の親指はそれぞれの中手骨（手の甲の骨）の高さ

で互いを抱きかかえ合います（図60）。ここでも、手の二重性が明瞭に現れています。人間は、自らの感情の生活や意志の生活から湧き上がってくる可能性のあるすべてのものを、自分自身の中で静めようとしているのです。彼は決断を下す前に、内なる静けさを求めています。

※図60



〔IV〕

絶望の淵にあるときの両手の姿勢は、注目に値します。この魂の状態においては、指は先ほど記述した第二の祈りの姿勢（指を組む形）と同じように組み合わされることがあります。しかし、その祈りの姿勢との違いは、次の点にあります。絶望している人は、いわゆる「手のひら」同士を互いに押し付けることはなく、また祈る人のように腕を身体へと引き寄せることもありません。両方の手のひらは「外側（前方）」へと向けられ、腕は前方へと突っ張るように伸ばされます。すべての筋肉は、指先にまで広がる緊張の下にあります。

激しい苦痛の中で、魂は完全に自分自身の中へと引きこもりたいと望んでいるかのような印象を与えます。考えること（思考）、感じること（感情）、欲すること（意志）が、まるで「ねじ曲がって」しまっているかのようです。このことは、魂のこれら3つの情動と深く結びついている指が、力強く互いに引っ掛け合っているという事実によって示されています。

このような振る舞いをしているとき、人間は自らの「自我」と再会することができません。自我はまるで身体の外へと追い出されてしまったかのようで、今はまだ、正気を保つことができないのです。だからこそ、手の内側（手のひら）が外側へと向けられるのです。手のひらにある、いわゆる「自我の点」は、祈りのときや内省のときのように、互いに出会うことがありません。深い人間的本質の喪失が、絶望の中にくっきりと反映されているのです。

腕と手が独特な役割を果たすもう一つの姿勢は、私たちが誰かの話を聴くために席に座るときに見られます。おそらく私たちは、その人を近くに招き寄せ、彼が私たちに何を語ろうとしているのかを偏見なく吟味したいと考えています。同様に、誰かが講演を聴きにいくときも、似たような意識で行うことがあります。その人は、自分に提供されるはずのものへと自らを開き、自らの全個性をもってそれを受け入れる準備をしています。しかし同時に、非常に客観的であり続け、可能な限り自分自身の感情の影響を抑止しようと心に決めています。感情はコントロールされなければならないのです。

このような聴衆は、外面からどのように見えるでしょうか。彼はぶら下がっている腕を前方へと軽く持ち上げ、両方の前腕をほぼ直角に曲げて、それらを「交差（腕組み）」させます。右手の4本の指は、左腕の肘の屈曲部の少し上を前方から掴み、右の親指はそれを後ろから支えます。これとは逆に、左手は同じ高さで右腕の下を掴み、右の前腕に支えられてほとんど見えなくなり、すべての指が腕の後ろに隠れて消えてしまいます。4本の指はしばしば密接に合わされており、左の親指はその指先（末節骨）を左の中指の基節（付け根の関節）の上に休ませています。この位置（ポーズ）は、私たち自身が実際にその姿勢を取ろうとしてみれば、すぐに明らかになります。

なぜこのような、完全に「無意識」から生じる姿勢が取られるのか、という疑問が生じるかもしれません。腕組みを行うためには、それらが身体の垂直軸の「真ん中」で交差することが不可欠です。人間において、左から右へ、また右から左へと交差させることは、常に彼が「自らの自我の中に内面的に引きこもり、感情をコントロールしたい」と切望していることのサインです。この意味において、ルドルフ・シュタイナーが例えばオイリュトミーや治療オイリュトミーに関する講演などの中で行った多くの観察も理解されなければなりません。

したがって、腕を交差させるという大きな主要な動きが意味しているのは、次のようなことです。「今、私は自分自身の中で意識的であり、一つの『自我』として、もう一人の人物と対峙している。しかし同時に、私は自分の『中間の人間（感情の領域）』の周りに、前腕と手で作られた一種の『甲冑（よろい）』をまとっている。私は、思考する人間の利益のために、感じる人間の領域を毅然としてロックしているのである。」

右手が左腕を引き留める一方で、左手は右腕によって囚われています。もし引き留めるという備えがされていなければ、私は右手から、「今、そして将来にわたって、私は今聴くべき意見に反対である」ということを示す身振りを引き起こしてしまうかもしれません。あるいは、感情の高ぶりから生じる同意には決して従わないという決意を表明する身振りをすることもできるでしょう。これに対して、左腕を使えば――もしそれが自由であったなら！――過去の運命（カルマ）の状況から、どのように肯定的に、あるいは否定的に振る舞うことができるかを示すことができるでしょう。これらすべての明確でないエモーションは、かんぬきをかけて閉ざされなければならないのです。

左手はその指とともに、万力に挟まれたかのように右腕によって固定されています。動かすことも、表現することもできません。このようにして、ある個性は、感情によって第一印象から影響を受けないように、腕組みという極めて有意味な方法を通じて自らを保護しているのです。もし聴衆が意志の介入からも自由でありたいと願うならば、さらに「足を組んで」座ることになります。その後、今聴いたばかりの事柄に自分を完全に開きたいと思ったときに初めて、彼は手と脚の交差を解き、場合によっては拍手をするために手を使うことになります。このような両手の接触において、「中間の人間」は再び、豊かな魂をもって働き始めるのです。

〔V〕

演説（スピーチ）において手が完全に排除されている（使われない）場合、それはほとんど常に、話し手が「リズムの人間」に関わるものを何一つ表面化させたくないと考えているサインです。情動から湧き上がってくる可能性のあるものは、何一つ透けて見えてはならないのです！

もちろん、あらゆる機会に腕や手を空気中で振り回す、一部の南方の民族（南欧の人々）のように、動きを過剰に誇張する必要はありません。しかし、彼らがそうするのは、言葉の一つひとつに自分の感情を込めているからである、ということが知られています。イタリア人にとって、この振る舞いはお馴染みのものであり、それは彼が自らの「魂の感覚」から生じるものを非常に力強く生きているという事実に根ざしていま

す。これは、ルドルフ・シュタイナーが名付けたところの、彼らが自らの内面に「感覚魂」を発達させていることによるものです（ルドルフ・シュタイナー著『神智学』を参照）。

さらに、腕組みというものは、本来は「座っている人間」により適したものであることにも注目すべきです。そこでは感情がある程度の意識をもって抑え込まれ、意志のスイッチは切られています。これとは逆に、「ズボンのポケットに手を入れて話す」ことは、むしろ「立っている人間」に多く見られることです。そのような人は、自分の感情を沸き上がらせるリスクも、意志の生活（行動）へと入っていくリスクも冒そうとはしません。彼は意志の生活を不活発なままにしておくことを好むのです。

さらに、この一連の流れに属する第3の身振りがあります。それは「歩いている人」や「散歩している人」に観察されるものです。街中や森の小道で、時折、両手を後ろでしっかりと組んで歩いているハイカーに出会うことがあります。彼らは、散歩をしながら特定の事柄についてじっくりと思索するために歩いているのです。グリム兄弟の一人は、ベルリンの庭園をそのように長い時間をかけて散歩し、魂の中に重要な問いを行き来させていたと語っています。そうすると、ほとんどの場合、解決策を見出して家に帰ることができたそうです。彼はこの習慣を高齢になっても実践していました。

このような歩行者たちは、通常、腕を後ろに伸ばし、手を背中、より正確には仙骨の領域に固定します。これはほとんどの場合、左手が指の力を抜いて軽く内側に曲げられた状態で手の甲を下に向け、それを右手で上から掴むという形で行われます。右手の4本の指が左の手首、あるいは左の手の甲だけを掴む一方で、右の親指は、4本の指が置かれている側とは反対側から左の手首を力強く捉えます。時には、親指と中指が触れ合うことで、背中に置かれた左の手首の周りに頑丈な「輪」を形成することさえあります。

この姿勢においては、実は「腕組み」とはまったく逆のポジションが取られています。中間の人間の周りに、感情の世界からの遮断をもたらすような抑圧的な甲冑（よろい）が置かれないだけでなく、リズムの人間（胸の領域）を前方で完全に自由にし、一切の障害がない状態に保っているのです。呼吸は妨げられず、肺の働きを阻害するものは何もありません。形成されつつある思考は、感情のリズム豊かな流れによって容易に満たされます。大股での歩みが血液を正しく流させ、思考を働かせるのに忙しい頭へと、意志の持つ温かさ（熱）の力を伝えることを可能にします。このようにして、上部、すなわち頭において、生命力と活力に満ちた思考が発展することができるのです。

記述した身振りによって、感情の世界に健全なバランスがもたらされます。運命という観点から見れば未来を指し示す「右手」によって、過去の出来事の表現がより多く現れる「左手」が優しく抑え込まれるのです。魂を圧迫する可能性のあるすべてのものは、腕と手が背後に残され、静かな沈思黙考の中に置かれることで、賢明にも遠ざけられます。最後に記述した、大股で歩いている人間のこの身振りは、自らの前に腕を組み、その魂の姿勢をさらに強めるために脚まで組んで座っている人間の姿勢とは、完全に好対照をなしているということを忘れてはなりません。

際立って胆汁質的な気質を持っていた2人の最も重要な人物が、私たちの提示する中で、完全に正反対の2つの姿勢によって際立っていることは、非常に注目に値します。当然ながら、これは彼らの姿として私たちに伝わっている肖像に関連しています。一人は、前方で腕を組み、権力によってヨーロッパの諸民族を抑圧し、彼らから自由を奪ったナポレオンです。そしてもう一人は、両手を後ろに回して歩き、人間の精神的自由の確信に満ちた指導者であったベートーヴェンです。

〔VI〕

もし私たちが、手とその動きによって表現され得る事柄を真に要約したいと願うならば、ラファエロによって描かれ、ルドルフ・シュタイナーが特に注目を促したさらに2枚の絵画を参照することができます。それは、ボローニャにある『聖チェチーリア』と、ロンドンのサウス・ケンジントン美術館（現在のヴィクトリア&アルバート博物館）にある『パウロのアテネでの説教』です。

これら2つの絵画に描かれた、表現のまったく異なる2つのパウロの頭部（顔つき）を調べてみましょう。『聖チェチーリア』（図61）の絵の中に見出される使徒パウロの顔立ちには、「感覚的な人間」が表現されています。ここでは、パウロは静かな内なる眼差しと内なる聴覚によって霊的世界から受け取るものに、完全に没頭しています。彼はただ見ているだけでなく、聴く必要もあります。なぜなら、聖チェチーリアの足元には楽器が置かれており、彼女はそのうちの一つを手の中に留めながら、天使の合唱が地上へと響き渡る天空の高みへと眼差しを向けているからです。シュタイナーの言葉を借りれば、この絵画には「天球の音楽の形象的な表現」が見られます。

※図61



パウロは天の世界からやってくるこれらのイメージと響きを、非の打ち所のない完璧な魂の静けさの中で吸収しています。このような厳かな瞬間には、人間の個人的な自らの意志から湧き上がるすべてのものは、沈黙できなければなりません。ラファエロは聖人の手において、これをどのように表現することに成功したでしょうか。それは「右手」の動きを通じてです。この右手は、意志の表現として最もふさわしいと思われる顔の一部、すなわち「顎」を両側からしっかりと挟んでいます。右側からは「親指の手」で、左側からは「指の手（4本の指側）」で、顎を力強く固定しているのです。自らの意志は意識的に抑え込まれなければなりません。それは自らの「言葉」も同様であり、顎が固定されている間は、口から言葉が飛び出すことは絶対にありません。

その姿勢から、明らかな静けさが放射されている様子は、深く心に触れるものです。そこにはいかなる冷酷さも見られず、いかなる強制も垣間見えません。このような表現が可能になるのは、魂から湧き出るものが、手の中にこれほど表現豊かに現れ得るという事実によるものです。ここでは、手全体が等しくその身振りに参加しています。人間は、完全な意識と静けさの中で、霊の中に生きる存在として自らを顕わにしているのです。

この聖なる静けさ（前述の『聖チェチーリア』のパウロ）と、今度は『パウロのアテネでの説教』の絵の中に描かれている、説教者としてのパウロから見て取れるものを比較してみましょう。そこでは、彼の腕と手の「動き（可動性）」が示されています（図62）。

※図62



ここでは、すべてが開かれた口から流れることのできる「言葉の宣言」へと集中しています。かつて眼差しによって高みから受け入れられ、魂へと浸透したものが、今や独自の意志の炎とともに内面から解放されているのです。それは精神（霊）において、衣服のひだにまで見て取れるような、嵐のように激しく大胆な動きへと姿を変えています。腕は上方に向かって斜めに伸ばされており、もう一方の絵のように曲げられたり抑え込まれたりしていません！ それらは今や、かつてこの幻視者（パウロ）に示された天の世界、高みの方を指し示すことができるのです。

心の熱が、彼の指先にまで行き渡っています。おそらく前の絵のパウロ以上に、この姿においては、右手と左手のあらゆる部分、すべての指とすべての指節が、パウロの説教を通じて聴衆に知覚される「意志の知恵」によって、等しい度合いで満たされていることが明確に表現されています。

そして、この演説者の壮大な身振りを通じて、私たちにとってもう一つ明らかになり得ることがあります。この人物において私たちが聴くことのできる、あらゆる偉大で強力なものは、まさにその「腕と手」に宿っていますが、そこには狂信的な荒々しさは微塵もありません。そこにあるのは、キリストが彼の心に授けた「行動」へと向かう、愛に支えられた意志の呼びかけです。ラファエロの表現をこのように感じ取ることができる可能性は、何よりもまず、この腕と手の動きの中に宿っているのです。

特に重要で感動的なのは、両方の手のひらの面が「互いに向かい合っている」ポジションです。私たちが両手を合わせて祈りを捧げるとき、私たちは自分自身の感じる自我のすべてをもって、自分自身へと集中します。しかし、パウロのこの身振りには、さらに特別なものが含まれています。両方の手のひらの面は、確かに互いに向かい合っていますが、「触れ合ってはいない」のです。手が開かれているのは、演説者がまるで、左手と右手のひらから放たれる目に見えない光線がその中心点で交わるような、そんな目に見えない空間の中に聴衆を包み込んでいるからです。彼は愛をもって、人間が自らの感じる存在を純粋に知覚することのできるあの中心へと、聴衆を包み込んでいるのです。

「……そして、ラファエロがパウロの観相学において、パウロの身振りにおいて深く研究したものを、指の動きの領域にまで拡張させてみなさい……」
（前述の講演におけるルドルフ・シュタイナーの言葉より）

〔あとがき〕

●基本的視点

人智学的観相学の立場では、
手は「無限に人間的なもの」であり、
生涯の歴史を最も鮮明に示す器官である。

顔の謎をシュタイナーの方法で解いてきた著者が、
同じ精神的視点を手に向け、
死後も手が特別な表現力を持つという講演に触発され、
手の形態と身振りを通じて人間を読み解く試みを始めた。

●要点

・幼少期から顔を「謎」と感じ、
シュタイナーの概念によって少しずつ解いてきた著者が、
手にも同様の精神的観相学が欠けていることを長年意識していた。

・干し草を集められないロバを見た少年の言葉がきっかけとなり、
「手こそ誇りにすべき人間固有のもの」だと強く自覚する。

・1923年ハーグ講演でシュタイナーが、
死後は頭部が不明瞭になる一方、
腕と手に生涯の歴史が最も鮮明に現れると述べたことに衝撃を受け、
研究を開始。

・本書は「始まり」に過ぎないが、手の謎を現代人に思い出させ、
地上での実践的観察を促すとともに、
死後の魂が死者を認識する助けにもなりうる。

・死後の生を疑う人でも、手の形態と身振りの真実性を認めれば、
これほど深い神秘が死後に無意味に消えるはずがないと感じ取るはずである。

●本文

読者の方々にとって、本書を通じて関わってきた著者が、ここでより個人的な性質の回想を述べることは、興味深いことかもしれません。私は以前の著書『顔は人間を明らかにする（A face revela o homem）』の冒頭で、すでに子どもの頃から、出会う人々の顔が自分にとってどのように「謎」へと変わっていったかを語りました。その後、ルドルフ・シュタイナーが世界にもたらした方法と概念のおかげで、何年もの歳月をかけて、一歩一歩その解決策が探求され、可能になっていったのです。

つい最近まで、私は手の形態の中に隠されている秘密にも近づきたいという、根強い願いを抱き続けていました。私たちの時代において、精神（霊）に基づいた「手の観相学」がいまだ存在しないことは、非常に大きな欠落であると常に考えていたのです。

しかし、私がこの欠如を特に強く意識させられたのは、ある日、一人の少年と一緒にいたときのことでした。私たちは、前脚で地面を引っかきながら、そこにある干し草をなんとか集めようと奮闘している一頭の小さなロバに直面しました。その動物は非常に苦労してそれを行っており、それをつぶさに観察していた少年が、突然こう言ったのです。「自分の口に干し草を詰め込めるような『手』がないなんて、ロバくんにとっては本当に悲しいことに違いないね」

この言葉は、私の内面に衝撃を与えました。なぜなら、その子どもは完全に自分自身の力で、手というものが「無限に人間的なもの」であり、私たちが誇りに思うべきものであるという事実を発見したからです。私たちは、動物たちが本当の手を持っていないことに対して、実際に同情の念を抱くべきです（サルの仲間は除外して考えることができますが、世界には手を持たない無数の動物たちが存在します）。

それ以来、人に差し出される手、手を振る仕草、演説者の表現に寄り添う手、そして最も荒々しい仕事から最も繊細な仕事までをやり遂げる手に対する私の敬意は、ますます大きくなっていきました。

そしてついに少し前のこと、ルドルフ・シュタイナーが1923年11月にオランダのハーグで行った講演録の一つに巡り合いました。そこで彼は人間について、人が「死後にどのように生きるか」、そして「その姿がどのようになるか」を語っています。死後、頭部や顔立ちははっきりとしないものになりますが、それに対して「中間の人間（胸・リズムの領域）」ははるかに表現豊かになります。続いて彼は次のように語っています。

「死後、腕と手は特別な表現能力を持ちます。腕と手においては、誕生から死までの人間の生涯の歴史を直接読み取ることができ、それは手において最も鮮明に現れます。手というものは、肉体生活の時点ですでに、感受性豊かな観察者にとっては、その外見によって非常に意味深いものであり、肉体生活においてすでに多くの事柄を示しているのです……」

これらの言葉は私にとって非常に電撃的なものであり、私の中に新しい意志の衝動を目覚めさせました。こうして私はこの研究を開始し、これによって、すべての謙虚さをもってではありますが、手を理解するためのひとつの鍵を提供できたことを願っています。

ここで提示したのはおそらく単なる「始まり」に過ぎませんが、これは現代を生きる私たちの同胞、すなわち人間に、手の謎を新たに思い出させるための注意を惹きつける役割を、結果的に果たせるかもしれません。そして、もしこれが実践的な観察へとつながるならば、それは地上において有益であるだけでなく、あちら側の世界へと入っていく、亡くなった魂たちへの助けにもなり得るのです。手とその動きを理解することによって、彼らは出会う死者たちの存在を、より容易に認識することができるようになるかもしれません。ルドルフ・シュタイナーは、死後のこの時間について、手への言及を交えてこう語っています。

「死者の手において、人はその人間の人生の歴史を直接読み取ることができる。」

しかし、たとえそのような死後の生活を疑わしいと思う人であっても、手の形態や身振りが意味するものの真実性を認めるならば、人間の手ほど深い神秘が、死後に無意味虚無へと霧散してしまうはずがないということを、少しずつ感じ取ることになるでしょう。